日本名著全集 江戸文藝之部 見出し索引

あいうえお順
解は解題又は解説のこと
淨上は淨瑠璃名作集上巻の事

あノ部

題名	部類		頁
商に氣の廣いむさし男	浮		六三七
秋の色種	音	長唄	九〇四
秋の時候	滑		三五四
秋の日の序	俳		四九六
秋の七草	音	歌澤	九三四
秋の白膠木	音	河東	二八四
秋の野に出て	音	歌澤	九三二
示ニ秋之坊一辭	俳		二二二
秋の山ぶみ	和上		三七〇
秋の山ぶみといふを題にて作れる文	和上		一九九
秋の夜長に	音	歌澤	九三三
秋の夜は	音	歌澤	九四三
惡漢は天罰を受け親兵衞は神隱しとなる	八上	梗概	九七
惡性あらはす螢の光	西下		八七六
惡事見へすく揃へ帷子	西下		三二七
惡報明を失ふて更に懺悔を事とす	八下		一八一
明烏花濡衣	音	清元	六三〇
明烏	音	清	六三〇
明烏	音	新	六六二
明烏后眞夢	音	新内	六六七
明烏夢泡雪	音	新内	六六二
明智計	謠		六八四
明て驚く書置箱	西下		九四一
明て悔しき養子が銀笘	西上		九七八
曙草紙(解說)	讀	解	九
曙草紙 卷之一	同		一
同 卷之二	同		三八
同 卷之三	同		六二
同 卷之四	同		八四
同 卷之五	同		一一八
曙	謠		六四四
揚屋町の意氣づくに小指の身がはり	淨下		二五九
阿漕	謠		三四一
阿古屋松(曲舞四十六番のうち)	謠		六四〇
阿古屋松(番外謠曲のうち)	謠		六六〇
朝顔	謠		七〇〇
朝顔姫道行	淨上		一一
朝顔の	音	歌澤	九三五
朝香山	西下		四一四
淺草觀世音境內の場	歌舞		七一六
同 奧山の場	同		七四九
同 裏田圃の場	同		七五二
淺草新寺町於ニ西光寺一開卷桃井庵和笛追善句合	川		七四八
淺草寺	西上		四二八
淺草の 人芝の花作	西下		四〇九

い の部

題目	書名	種類	頁
今様小鍛治	音		九一〇
今様四季三番叟	音		七六七
妹背山婦女庭訓(解題)	淨下	解	六八
妹背山婦女庭訓第一	同		六二三
第二	同		六三六
第三	同		六四九
第四	同		六六二
第五	同		六八一
妹背山道行	音	常磐	四三三
守宮の妖	怪		一八九
苛子の海中に與保千金を撈る	八下		九二
入日の鳴門浪の紅井	西下		一〇〇三
入商は花のむかし	西下		一〇二九
いろけないとて	音	歌澤	九三三
色里一遍上人大臣共へ色道の教化	浮		五四二
色噪ぎ御遊び寺の迷惑	西上		八三三
色の水上波分けた御鯛茶屋の監釜	淨下		一
色に見籠は山吹の盛	西上		八一三
色山解深川	音	清元	五八八
色は當座の無分別	西下		七八〇
色はふたつの物あらそひ	西上		七五九
色増艶夕映	音	清元	六五〇
色彩間苅豆	音	清元	三九一
色を染む血氣の親父	浮		八六七
磐提山	西下		三九〇
岩振山	西下		五〇三
因果の小蛇	讀		一九四
因果の闘守	西上		五八
因果のぬけ穴	西上		三六二
陰鬼陽人輩て判然	八上		五六九
隠居舞	俳		三一七
隠口塚序	俳		五八六
飲食色欲箴	俳		二八一
韻塞、解説	俳		五四七
韻塞	俳		七八三
淫婦中位	西上		五九五
淫婦の美形	西上		五八四

うノ部

題目	書名	種類	頁
植木屋	音	薗八	七三三
鵜飼	謠		五〇九
鵜飼	芭		二六五
鵜飼石和川	音	一中	三四六
うかぶ瀬	音	河東	二五五

作品		頁
梅の匂ひ吹わたる大橋	浄	二六七
梅美婦禰	人	五五七
同　巻之一	同	五六一
同　巻之二	同	五六八
同　巻之三	同	五七六
同　巻之四	同	五八七
同　巻之五	同	五九四
同　巻之六	同	六〇一
同　巻之七	同	六一一
同　巻之八	同	六一八
同　巻之九	同	六二五
同　巻之十	同	六三六
同　巻之十一	同	六四三
同　巻之十二	同	六五〇
同　巻之十三	同	六六〇
同　巻之十四	同	六六六
同　巻之十五	同	六七三
梅美婦禰　第一回	人	五六一
同　第二回	同	五六四
同　第三回	同	五六八
同　第四回	同	五七二
同　第五回	同	五七六
同　第六回	同	五八〇
梅美婦禰　第七回	人	五八七
同　第八回	同	五九〇
同　第九回	同	五九四
同　第十回	同	五九八
同　第十一回	同	六〇一
同　第十二回	同	六〇四
同　第十三回	同	六一一
同　第十四回	同	六一四
同　第十五回	同	六一八
同　第十六回	同	六二一
同　第十七回	同	六二五
同　第十八回	同	六二八
同　第十九回	同	六三六
同　第二〇回	同	六四〇
同　第二一回	同	六四三
同　第二二回	同	六四七
同　第二三回	同	六五〇
同　第二四回	同	六五五
同　第二五回	同	六六〇
同　第二六回	同	六六三
同　第二七回	同	六六六
同　第二八回	同	六七〇
同　第二九回	同	六七三

えの部

英對曖語　巻之五	人	四五五
同　巻之六	同	四六四
同　巻之七	同	四七七
同　巻之八	同	四八五
同　巻之九	同	四九三
同　巻之十	同	五〇六
同　巻之十一	同	五一四
同　巻之十二	同	五二一
同　巻之十三	同	五三二
同　巻之十四	同	五三九
同　巻之十五	同	五四七
同　第一回	同	四一八
同　第二回	同	四二三
同　第三回	同	四二七
同　第四回	同	四三一
同　第五回	同	四三五
同　第六回	同	四四〇
同　第七回	同	四四六
同　第八回	同	四五〇
同　第九回	同	四五五
同　第十章	同	四五九
同　第十一章	同	四六四
同　第十二章	同	四六八
同　第十三章	同	四七七
同　第十四章	同	四八一
同　第十五章	同	四八五
同　第十六章	同	四八九
同　第十七章	同	四九三
同　第十八章	同	四九八
同　第十九章	同	五〇六
同　第二十章	同	五一〇
同　第二十一章	同	五一四
同　第二十二章	同	五一七
同　第二十三章	同	五二一
同　第二十四章	同	五二五
同　第二十五章	同	五三三
同　第二十六章	同	五三六
同　第二十七章	同	五三九
同　第二十八章	同	五四三
同　第二十九章	同	五四七
同　第三十章	同	五五〇
江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話	怪	五九五
同　下	同	六〇五
江口	謠	一七一
繪師	俳	三五四
江尻	西下	四六四

おの部

きの部

書名	分類	頁
君は今頃	音　歌澤	九四二
客を留めて次團太闘牛に誇る	八中	一二五
客者評判記（解說）	滑　解	四八
客者評判記	同	四二三
同　卷之上	同	四四六
同　卷之中	同	四五九
同　卷之下	同	四八三
遊將人を樹にして公子衛を褒ふ	八中	四三一
逆旅の小集妙に鄕豪を懲す	八中	二五二
客船に唄して水寃鬼酒を沽る	八下	八三
木やり	音　富本	五四一
舊恩を報答して戊孝前言を全うす	八下	五五三
仇家の恩人	讀	二四二
九花亭記	俳	二七〇
舊君に謁して信乃父祖の忠義を詳にす	八下	五七九
窮寇を追失ふて助友敵を換ふ	八上	五三〇
給仕盆丸年廿年の奉公	浮	五九六
灸すゑ巖の疊夜着	音　河東	二四七
舊跡遺聞序	和上	三七六
舊黨招に應じて土民益憂ふ	八中	四二三
窮鳥舊巢に還りて巧に囀る	八下	一四五
牛馬の沼	西下	四〇八
窮阨初て解て轉故人に遭ふ	八上	六七一

書名	分類	頁
京へ見せいで殘りおほいもの	西上	八六八
經を營む信心親父	浮	九〇一
俳客提要達多品	讀	四〇八
同	同	四一三
俳客南獨六素藤を襲ふ	八下　梗概	五七
狂歌才藏集（解題）	狂　解	三四
狂歌才藏集	同	七二一
同　春歌	同	七二五
同　夏歌	同	七三〇
同　秋歌	同	七三三
同　冬歌	同	七三七
同　離別歌	同	七四〇
同　羇旅歌	同	七四〇
同　哀傷歌	同	七四一
同　賀歌	同	七四三
同　戀歌	同	七四四
同　雜歌	同	七五〇
同　雜體	同	七五六
同　釋敎歌	同	七五八
同　神祇歌	同	七五九
狂歌三體傳授跋	狂	八二〇
狂歌新玉集	狂	七九七
狂歌すまひ草	狂	八〇四

くの部

け の 部

喧嘩のうそ	滑	六二八
喧嘩のまこと	滑	六二九
源五兵衛おまん夢分船	近上	二三三
現金論序	狂	八〇一
現在七面	謠	五〇〇
現在千方	謠	七六七
現在鵺	謠	五八二
現在經政	謠	六三二
源氏烏帽子折(解題)	近上解	四四
源氏烏帽子折第一	同	九三
同　第二	同	九八
同　第三	同	一〇二
同　第四	同	一〇九
同　第五	同	一一三
賢士重て犬士を知る	八中	六二三
源氏供養	謠	二三七
源氏車の	音歌澤	九三九
源氏雪月花	音長唄	八九九
犬士隱退して天命を樂しむ	八下	七八二
絃上	謠	六〇五
元緒	怪	三九二
犬士露宿して兵隊を迎ふ	八下	三一

幼住庵記	芭	六九〇
幼住菴記	俳	二六七
賢女手習幷新暦(解題)	近上解	四〇
賢女手習幷新暦第一	同	三七
同　第二	同	四一
同　第三	同	四六
同　第四	同	四九
同　第五	同	五四
源太夫	謠	四四
劍の本地	近上	五五八
現八一角の亡靈に逢ふ	八中梗概	八二
現八單身にして衆惡と戰ふ	八中	三三
現八箭を拔て水死の將を救ふ	八下	五七二
現八遠謀赤岩に赴く	八中	一五
現八郎遠く良藥を求む	八上	三九四
元服曾我	謠	四三四
見物左衛門が化の皮は狐にあらぬ通力のお國戲場	滑	四二七
源平妹脊の鷄合	音一中	三三九
源平雷傳記(解說)	歌舞解	一一
源平雷傳記	同	七七
同　第一	同	八〇
同　第二	同	八五

題目	書名	種類	頁
源氏雷傳記第三	歌舞		八八
同　第四	同		九五
玄峰集(解說)	俳	解	一一
玄峰集かみ	同		一六一
同　春の部	同		一六三
同　夏の部	同		一六六
同　しも	同		一七一
同　秋の部	同		一七一
同　冬の部	同		一七七

この部

題目	書名	種類	頁
碁	謠		六三五
戀	俳		二三
戀男調松風	音	長唄	八四二
戀風は朱のあかりつぼねにさがり有	西下		七〇七
戀衣對の白むく	音	新內	六九〇
戀傾城	音	長唄	八六八
戀櫻反魂香	音	河東	二六五
戀し〳〵が	音	歌澤	九四〇
戀路の內證疵	西上		二三三
戀路山	西下		四〇一
戀すてふ	音	歌澤	九三八
小磯	西下		四四八
戀といふ字は	音	歌澤	九四三
戀に泣輪の井戸替	西上		五〇三
戀女房染分手綱	音	義太	二一
戀重荷	謠		三五六
戀のすて銀	西上		四〇
戀の說	俳		四二四
鯉のちらし紋	西上		三七八
戀の出見世	西上		三八五
戀の松原	謠		三三七
戀の燒付柴屋町の門立	浮		三一七
戀の罠奇掛合	音	長唄	八四三
戀は闇夜を晝の國	西上		四八七
戀娘昔八丈	音	義太	六四
項羽	謠		五一六
小哥の傳授女	西上		六五二
古園俳格跋	俳		七三
黃岡亭記	俳		五〇七
こうかき	俳		三三六
合歡の花桶	讀		八五三
孝感力藝詠歌奇異を賛す	八下		七二五
厚顏抄補正序	和上		三八三

さの部

しの部

題名	種別	頁
順禮歌の段	音 義太	三八
蕉翁全傳 解說	芭	八六二
芭翁全傳	同	八九五
易生契	怪	二一四
情を含て商路憂苦を訟ふ	八上	二九九
春ニ嘯花ー文	俳	四七一
嘯花誄	俳	五〇九
鍾馗	謠	五一一
鍾馗畫讃	俳	四五三
上宮太子	謠	六三三
上宮太子	謠	六七三
昭君	謠	五一八
上戸丸はだかみだれ髪	西下	八五〇
招魂賦	俳	二四五
正直な親父を一呑にする上戸形氣	浮	六八六
正神宜童部	淨上	三三〇
正直は一端の木綿商	浮	五九九
しやうじきは明りを走る首かせ	浮	七四七
賀ニ小女ー辭	俳	五二〇
猩々	謠	六二一
猩々賛	狂	八一七
猩々亂	音 長唄	七六七
小乘樓に一僕故主に謁す	八中	六八六

題名	種別	頁
生死流轉藥草喩品	讀	五〇一
松操菴記	俳	五四六
松窓乙二發句集(解說)	俳 解	五九
松窓乙二發句集	同	一〇二五
同 上春之部	同	一〇二八
同 夏之部	同	一〇三三
同 下秋之部	同	一〇三八
同 冬之部	同	一〇四三
同 雜之部	同	一〇四七
丈艸誄	俳	二八九
丈草之跋	俳	五四二
丈草發句集(解說)	俳 解	一二
丈草發句集	同	一九五
同 春	同	一九七
同 夏	同	一九八
同 秋	同	二〇〇
同 冬	同	二〇一
同 追加	同	二〇三
正尊	謠	四九三
松竹梅嫁入雛形	近下	三八五
庄野	西下	五〇一
狀箱は宿に置いて來た男	西上	四九四
正札附	音 長唄	八五二

すの部

せの部

その部

題目	書名種類	頁
其面影二人椀久	音 長唄	八〇三
其面影は雪むかし	西上	一一三
其小唄夢廓	音 清元	五七三
第二番目九變化	音 長唄	八七七
其容形七枚起請	音 長唄	八〇〇
蘭八節の部	音	七一五
其袋(解説)	芭	五三八
其袋	同	六三三
同 春の部	同	六三六
同 夏の部	同	六四二
同 秋の部	同	六四八
同 冬の部	同	六五二
その文月	浮	四二
其雪影序	俳	六八七
曾波可理(解説)	俳解	三三
曾波可理	同	九五七
同 春	同	九六一
同 夏	同	九六四
同 秋	同	九六六
同 冬	同	九六八
蕎麥切頌	俳	三三三
蕎麥論	俳	三二〇
ぞめきにごんせ	音 歌澤	九三三
空も長閑に	音 歌澤	九三三
與レ某文	俳	五一二
賀ニ某剃髪ー文	俳	五〇二
仍ニ其求ー作序	俳	四八五
菜別野記	俳	五二四
空辭宜の虚	滑	六〇九
祖翁口訣	芭	二六七
それ／＼名付親	西下	一〇一六

たの部

題目	書名種類	頁
大往生は女色の臺	西上	三〇三
大會	謠	五四三
太神樂	音 常磐	四一五
大柏の權輿	讀	五八四
對牛樓の復讐	八中 梗概	六九
對牛樓に毛野讐を鏖にす	八上	六六一
太祇句選跋	俳	六八五
太祇句選(解説)	俳解	二七
同 前編	同	五七三
同 春	同	五七九
同 夏	同	五八二
同 秋	同	五八四

内裏金樓閣の場	歌舞		四五一
内裏記錄所の場	歌舞		四五二
内裏紫宸殿の場	歌舞		四二六
内裏紫宸殿廊下の場（返し）	歌舞		四三五
内裏門前の場（返し）	歌舞		四四一
内裏紫宸殿の場（返し）	歌舞		五六七
第六天	謠		五四一
絕間池の演義強頸の勇衣子の智ありし話	怪		七九一
當麻	謠		六二一
高尾懺悔	音	富本	五一七
高尾懺悔	音	長唄	七五六
高尾懺悔の段	音	長唄	七五六
高木	西下		三九三
高倉	西下		四一三
高砂	謠		八
高砂丹前	音	長唄	八二一
高砂松の段	音	一中	三一三
高すなご集序	俳		六九
高洲ちもりに茂る戀歌	浮		三一四
高津宮	西下		五二五
高暖の板橋に道節戰馬を放つ	八中		三六四
篁千古が七十の賀の歌の跋	和上		三九七
高屋暖に悌順野豬を搏にす	八上		六〇九

高安	謠		六九一
高安小町	謠		六九五
孝吉節義義實に辭す	八上		九七
薪荷雪間の市川	音	常磐	四四五
瀧田の近邨に狸雛狗を養ふ	八上		一〇六
瀧田の三士生捕を獻る	八下		三八五
瀧詣のあひぼれ	浮		七九
瀧本坊昭乘法師三十六人歌合墨帖跋	和上		三九六
薫物賣	俳		三九一
瀧夜叉姬	音	常磐	四三九
濯老井賦	俳		四六二
たけしば	讀		九五一
竹中砦の段	音	義太	一三〇
竹に雀は	音	歌澤	九三二
竹に雀は	音	歌澤	九四四
竹になりたや	音	歌澤	九三七
竹の浦	西下		三九四
竹雪	謠		三一四
田子菴記	俳		四八一
手越里	西下		四六六
田子の浦	西下		四六一
黄昏姿	音	長唄	七八二
只取ものは澤桔梗銀で取物はけいせい	西下		八六一

ちの部

つの部

ての部

との部

なの部

にの部

ぬの部

ねの部

のの部

はの部

ひ の 部

ふの部

への部

ほの部

ま の 部

みの部

むの部

めの部

もの部

やの部

ゆの部

よの部

らの部

りの部

るの部

れの部

ろの部

わの部

索引大尾

小袖曾我薊色縫

（歌舞伎脚本集補遺）

十六夜清心の補遺配布にあたりて

守隨憲治

昨年の夏、脚本集編輯の際、突然河竹繁俊氏から幾册かの臺帳が示されて、都合で印刷に附したらどうかとの言傳があつた。見ると、從來の十六夜清心の補充に當る部分だ。驚喜もし不審も打つた。段々尋ねてみると、默阿彌門弟の某氏の手から最近同家の書架に收められたものであつたさうな。

一體「小袖曾我薊色縫」は春狂言だから、まづ對面があつたが、どうせ對面だから無ければ無しでも濟むもの〻、次に八重垣紋三が出て來ないと、小袖曾我を成さなくなり、木太刀の額は八重垣何某」云々の語りも意味をなさなくなる。それで始め、八方質してみたが、何家にも無いらしい。致し方なしとして、河竹氏の承諾の下に、默阿彌全集と同一の手法で、十六夜清心だけを抽出して、大正十三年上演の外題「花街模樣薊色縫」を附しておく事に決定してしまつた。ホンノ一足違ひで今度の分が間に合はなかつたのである。さて、早速次回配本の際に補遺として附足したかつたが、種々の事情から今日まで延び〳〵になつてしまつたもの〻、何とかして配布しておきたく編輯部とも交渉中であつた。而して、今日讀者諸彥と共に、始めて世に出る「八重垣紋三」の面貌に接する悅びを分ち得る事になつた次第である。右樣の譯で、此擧が本全集に於て、なされた動機は、一に河竹繁俊氏の御好意に據る所、厚く謝意を表する所以である。

小袖曾我薊色縫

第一番目三立目

鶴ヶ岡鳥居先の場
同　別當所の場

一蓧山武太夫　三十郎
一八重垣紋三　權十郎
一蓧山繁之丞　訥升
一花賣り佐五兵衞　與六
一戀塚求女　羽左衞門
一大江因幡之介　竹松
一塚本主水　橘之介
一牛窪臺藏　い太郎
一醫者古池順齋　村右衞門
一若徒宗助　國太郎
一近習　松次郎
一　蔀作
一　麥藏

一　出來藏
一長沼蓮藏　米次郎
一鴉森九郎藏　大よし
一　大引　吉六
一石神道六　關十郎
一妻木娘お雪　歌女之丞
一下女お常　市之丞
一腰元　藤松
一　辰三郎
一　扇之介
一　國代

本舞台三間の間。上手へ寄せて石の鳥居。是へ續いて石の玉垣、うしろ紅白の梅林。同じく釣枝、下手出茶屋、床几二脚並べあり。すべて鶴ヶ岡八幡鳥居先の體。爰に若い衆の仕丁四人、箒手桶を持ち掃除をしてゐる。此見え、大拍子にて幕あく。

○何と太郎又。いゝ日和ぢやアねえか、何ぼ奉公とはいひ乍ら、人は見物の遊山のといふ春先に、掃除をしてゐるも智慧がねぢやねえか。

△そりやア愚痴といふものだ。此掃除をするも私ぢやアねえ。今日は大江廣元様のお嫡子因幡之助様が當社へ御參詣。

□それに今日は、吉例の通り、弓初の御嘉例なれば、別段掃除も念を入れろと方丈様の言附け。

×時に、斯うしようぢやアねえか。もうお入りに間もあるめえから、部屋へ行つて一杯やらうか。

成程、夫(それ)がいゝ／＼。それぢやア内田で五ンつくはづまうか。

△待つものはお定りで鯣(するめ)の足に人

參の白和か。

□ さういふ中にも、もうお入りだらう。

× 早く部屋へ行かうぢやねえか。

四人 サア／＼行かう／＼。

（ト矢張り、大拍子にて、仕丁四人鳥居の中へ入る。三味線入り大拍子になり、向うより大江因幡之助𢌞衣裳大小にて、若殿の拵へ、牛窪愛藏塚本主水、同じく拵大小にて附添ひ、若者順齋坊主天窓の醫者の拵へ、中通りの近習四人弓と矢を持ち、顯元四人若い衆の侍二人手箱と床几を持ち出て來り、皆々宜しく花道に居並ぶ。）

因幡之介 實に／＼も時めきて、春風誘ふ梅ヶ香に千歳をのぶる鶴ヶ岡。

愛藏 お供に列る某も斯く初春のお目見えに、時を惠方の幸先よし。

主水 神の應護も著き鎌倉山の春霞、ひくや嘉例の弓初め、

順齋 當り外さぬ懸的も丸いは持前、頭まで丸くをさまる御代長久。

顯元○ 若殿樣の神詣で、花の魁、咲分けの、

顯元△ 匂も高き靑雲に心も屆く顯寵めも、

顯元□ 私共の氣も晴れて、

顯元× 萬歳うたふ星月夜、

侍○ のどけき春の睦し月、

侍□ 我々共に至る迄、

二人 お目度う存じまする。

愛藏 何は然れ、若殿樣には先づ、

皆々 お越し遊ばしませう。

（ト右の鳴物にて皆々本舞臺へ來り、因幡之介は床几にかける。愛藏女形は上手、主水順齋下手、中通り四人宜しく住ひこ）

因幡 今日當社へ參詣なすも武家の家例。御境内にて掛鳥の射術、兼兼其道に心を寄せる牛窪愛藏塚本主水、疾く／＼用意致してよからう。

愛藏 某が射術に心をゆだねる事、御前にも聞こしめされ、今日の御供、身に取りまして大慶に存じまする。

主水 未熟なる拙者めに今日當社にて掛鳥の御家例、若輩の身にとりまして、冥加至極有りがたう存じまする。

因幡 それなる弓矢、是へもて。

中通り四人 ハツ

（ト侍二人、弓矢を愛藏主水の前へ置く。兩人宜しく弓矢調べる事あつて、因幡之介へ辭儀をなし、思入れあつて、立上りこ）

愛藏 然らば御免下さりませう。

（トかすめて風の音になり、兩人こなし有つて、弓矢を番ひ、揚幕へ向ひ、射て放す事あつて元の座へ直る。）

侍イ　御両所の弓勢は某などの及ばぬ所。

侍ハ　射たる矢先の獲物をば、

侍ロ　早く此場へ取寄せて、

侍ニ　其勝敗を見たいもので、

侍四人　御座るてな。

（ト此中バタ〳〵になり、向うより若い柴の侍、鳥と雀を射抜きたる矢を持ち、直ぐに舞臺へ來り。）

仕丁侍ヘ　ハツ。二筋の矢に射抜いたる獲物を持參仕つて御座ります。

因幡　ヲヽ、それ待兼ねた。是へもて。

侍　ハツ。

（ト合方になり、因幡之介前へおき、下手へ入る。臺藏思入れあつて、ツカ〳〵と前へ出て、雀を射たる矢を取上げ、）

臺藏　何と、何れも御覧じたか。ここか日頃の手練でござる。武士たる者の心掛は爰でござる。主水殿の矢先にて射留めたるは大きな鳥、拙者が射たるは雀。小鳥を射るは寸的の眞只中を射ぬく程の術がなければ及ばぬ事だ。此様な大きな鳥を射ぬくのは犬打童が戯れに藁人形を射るも同然、お腹は立たれな主水殿、さ様なものぢやござらぬか。

主水　如何様、驚き入つたる臺藏殿の御手練。中々もつて拙者等の及ばぬ處、恐入つて御座ります。

臺藏　下世話に申す畑水練。此上共に武藝をばチト勵んだがよくござる。

（ト臺藏主水に憎態にいふ。主水こなしなつて、）

主水　今に始めぬ牛窪殿の其御教訓、有りがたう存じまする。其寸的の只中を射抜く程の術なければ射留る事の叶はぬ小鳥。羽交を拔いて其矢の印は何と印しござりまするな。

臺藏　ハテ、知れた事。拙者が射拔く此雀。拙者が矢故牛窪と印してござる。

主水　しかとさ様でござるかな。（ト矢を取り上げ、）此矢をとく〳〵と御覧なされ。

（ト臺藏矢の根をつく〴〵見て、恟りなし、）

臺藏　ヤ、こりや塚本と印してある。こりや違つた〳〵。そんなら、おれが矢ではなかつた。ホイ。

主水　イヤ何、牛窪氏。貴殿の矢にて射留めたるは是なる鳥、然も矢

の根に牛窪と印した矢にて、此鳥の胴を射抜くは、天晴御手練。其上ならず、八幡宮の此庭先、血汐を穢すのみならず、例へ鳥類なればとて、命をとるは無益の殺生。臺藏殿、御鍛練の程驚入つてござりまする。

臺藏　默り召され。主水殿。例へ射たるは鳥にもせよ、拙者ばかりが殺生にて、貴殿には殺生でござらぬか。雀を射たも無益の殺生。

主水　拙者が射たるは殺生ではござらぬ。

臺藏　そりや又なぜ〳〵。

主水　未熟作らも某は今日御嘉例の弓初め。獲物の小鳥は射て落とせど、ほんの羽交を縫うたる雀。疑はしくば之を見られよ。

（ト主水雀の矢を抜くと、風の音になり、差金にて雀飛去る。皆々感心の思入れ。）

主水　何と牛窪氏。射たる雀はあの如く遙かの梢へ飛去つても、矢張り無益の殺生と仰せらるゝか。

臺藏　ム、其儀は。

主水　よもや殺生とは申されまい。

臺藏　サアそれは。

主水　但し御批判ござりまするか。

臺藏　サアそれは。

主水　サア。

臺藏　サア。

主水　サア。

臺藏主水　サア〳〵〳〵。

臺藏　ム、。

（ト臺藏くやしき思入れ。腰元四人思入れあつて）

腰元○　始めの程の廣言に打つて替つた鳥の間違ひ。

腰元△　いつに變らぬ牛窪様の出ぞこなひ。

腰元□　あたら始が強いゆゑ、今となつては御氣の毒。

腰元×　笑止な事でござりまするわいなア。

因幡　ホ、ウ。天晴〳〵。兼て射術に心を寄すると聞きつるが、聞きしに增さる主水が働き。感心の仕つた。

侍○　夫に引替へ、牛窪氏が射留められたるあの鳥。

侍△　咽を射抜いて卽座の落命。

侍□　今日御嘉例の御祝儀も、

侍×　是では何の役にも立たず、

侍○　誠に是が、

侍四人　無益の殺生。

（ト此時願齋前へ出で）

順齋　いえ〳〵、申し何れも樣。此鳥は役に立たぬ事はござりませぬ。是は愚老がお貰ひ申しまする。

侍〇　順齋老。之をもらつて、

侍四人　何に致す。

順齋　四ツ谷の千葉樣にならつて、瘡の藥に致しまするテ。

四人　何を申す。

因幡　此上は近習の面々、嘉例にまかせ主水にならつて小鳥の獲物を射留めて見やれ。

侍四人　ハツ畏つてござりまする。

（ト立かゝる。順齋押へて、）

順齋　愚老も今日のお供なれば一ト先射留めて高名を致しませう。何れも其弓矢をお貸し下され。

（ト順齋弓矢を持ち、無器用に弓矢を番ひ向うへ向つて、弦を放す。手が狂ひ外れ、思入れにて、弦にて耳をすつて痛いといふ思入れ、弓を舞臺へ放り出して、）

ア、痛い〳〵。

（ト順齋耳を押へてしきりに痛む思入れ。中通り皆々立かゝり、捨臺詞にて順齋を介抱する。）

侍四人　コレ順齋老。如何致した〳〵。

順齋　ア、コレ、何れもお聞き下され。愚老も小鳥を射留んと弓と矢を番ひ、滿月の如くきり〳〵と引絞り、放つた矢先は誤たず、イヤ誤たずではない誤つて、手先の狂ひに弓は倒耳をすつて此通り。ア、痛い〳〵。是がほんの弓はさか弓と申すので御座る。ア、痛い〳〵。

（トしきりに痛む思入れ。中通り皆々介抱する事。腰元四人もをかしいといふ思入れ。大拍子になり、向うより寺小姓戀塚求女若衆髷袴一本差し、頰へ矢のかすり疵をつけ、若い衆二人仲間の形にて之を肩にかけ出來り、捨臺詞にて直に舞臺へ來り。）

〇　只今の矢はどなた樣かは存じませぬが、ねらひが外れて是なる若衆に、

△　わづかなれども、かなり疵が附きましたゆゑ、

二人　是迄召連れまして御座ります。

（ト求女を引出す。皆々思入れあつて、中通りの諸士、主水に向ひて）

侍〇　只今の矢は順齋老で、

四人　ござりまする。

（ト此中主水前へ出て思入れあつて、）

主水　コリヤ〳〵、シテ其方は何者なるぞ。

（ト求女前へ出て合方になり、）

求女　ハイ私は金澤稱名寺の小姓戀塚求女と申す者でござりまする。

順禮　ア、コレ〳〵今の矢は愚老なれ共、其矢の先へ通りかゝり、うろ〳〵致してをる故に矢がそれてのかすり疵。是は其方が不運、愚老が粗相ではないぞ。其方が粗相と申すものぢや。

求女　イヤ私はあれなる道の片ほとりを、往來ゆゑに通りましたに、貴方の矢が外れましたので、此樣な疵をうけましたも、災難とも諦めませうが、夫を私が粗相と仰つしやるは、それア貴方がチト御無理かと存じまする。

（ト此時臺藏つか〳〵と前へ出て、求女が着がみを無殘にとり、）

臺藏　コリヤやい若榮め。無理とは何が無理だ。まだ前髮の身を以て無禮な奴。こりや何だな。些かな疵を囮にして、われア言掛かりをひろぐのだな。顏に似合はぬ太い奴、強つて申さば手は見せぬぞ。

（トきつとなり、刀へ手をかける。）

因幡　臺藏。控へい。

臺藏　ぢやと申して。

因幡　ハテ控へいと申すに。

（ト是にて、臺藏不承〳〵に後へ下る。合方きつぱりとなり、）

例へ射たる矢は誰にもせよ、今日は身が嘉例の弓初め、往來の者に怪我あつては相濟まぬ。こりや主水。其者に手當を致してやりやれ。

主水　ハツ畏つてござりまする。コリヤ求女とやら。計らず其方が疵を負ふも時の災難。必ず心にさへぬがよい。其方も聞きやる通り、若殿樣より今の御詞。お手當を下さる間、了見致してくりやれ、コリヤ其箱これへ。

侍　ハツ。

（ト若い衆の侍、手箱を持來り、主人の前へおき、主水手箱の中より服紗包の金を出し、）

主水　只今も申す通り、若殿のお情、寸志の手當、有難う頂戴致せ。

（ト求女の前へ置く。）

求女　イエ〳〵此お手當を受けずとも、殿樣の今のお詞、下を憐む御仁心、お金はお貰ひ申さずとも、身にとりまして何程か有難う存じまする。もう〳〵痛みも致しませず、もう宜しうござりまする。

主水　ではあらうが、是は若殿の思召し、是非とも受けたるがよいぞや。

求女　イエ〳〵お金をお貰ひ申しま

しては濟みませぬ。此儀は御免下
さりませ。
臺藏　ヲヽさうだ〳〵。僅かばかり
のかすり疵、熊の油か天地膏で直
りさうなもの。
順齋　仰山さうにお手當には及びま
せぬ。私なぞは家内の者が嫉妬で、
此位な引掻き疵は絶えた事はござ
りませぬ。
臺藏　お手當等は、
兩人　御無用になされませ。
（ト是にて因幡之介きつとなり、）
因幡　ヤア默れ、兩人。身が情を以
て遣す金子。其身のしがを隱さん
爲め、要らぬ口出し、控へてをら
う。
兩人　それぢやと申して無駄でござ
る。
因幡　詞を返すか。控へてをらう。
兩人　ヘイ
（ト順齋臺藏、求女を尻目にかけて、不承〳〵に後へ下る。）
主水　若年者に似合はぬ利發。金子
を受けぬも正當なる氣質、感心々
々。然らば此方より使者を以て稱
名寺へ粗相の段詫致さん。
求女　イエ〳〵夫には及びませぬ。
其樣に御心配被下ますと、却つて
お氣の毒でござります。師の坊へ
は私より、途中で石に躓いて樹の
根で怪我せし態に申しまする。も
う宜しうござりまする。此細な事
で殿樣へまで御苦勞をかけまして
ござりまする。恐れ乍ら御機嫌宜
しう。貴方樣。いかいお世話樣に
なりましてござりまする。（ト順齋
臺藏に向ひ、）さ樣なれば貴方樣。（ト
挨拶をすれど知らぬ顏をしてゐるゆゑ、求女
立上り思入れあつて、）氣も晴渡る春の
日を思はず此身の災難に。
主水　靜かに行きやれ。
求女　ハイお暇申しまする。
（ト唄になり、求女思入れあつて、袴の芥を拂ひ、下手へ入る。因幡之介主水、求女の跡を見送り、女形も思入れにて見送る。）
因幡　イヤ主水。今の若衆は求女と
申したな。
主水　さやうでござりまする。
因幡　ア、末頼もしい者ぢやなア。
主水　思はぬ事に暫時の暇どり、
臺藏　若殿樣には別當方にて、
順齋　御休足遊ばされませう。
因幡　何樣。さ樣致すであらう。
主水　若殿樣には先づ、
皆々　いらせられませう。

（ト唄になり、此人數皆々鳥居の中へ入る。通り神樂甚九の合方になり、上手より車田、鵜ノ森、石神、蓮木着流した大小、鎌倉睨近（ちつきん）、各好みの拵へ。鵜ノ森二升樽をさげ、車田笹折をさげ、皆々生酔のこなし。揚枝をくはへ捨臺詞にて出て來り。）

石神　何と、何れも。此天氣のよいに一杯機嫌で、かうぶらついてゐる心持はたまらぬではござらぬか。

蓮木　そりやア、貴公の仰せらるゝ通り、拙者等はチト酒の上は惡うござるが、此梅花の盛りを見ては又格別でござる。何と車田氏、鵜ノ森氏。一句はんぺつてはどうでござる。

車田　イエ〳〵、拙者は俳氣は更にござらぬが、狂氣の心がござるから、春先でチトのぼせて狂氣の方なら持前でござるて。

鵜森　貴公はのぼせて狂氣でござるか。拙者は冷えるので疝氣でござる。ハヽヽヽ。時に、石神氏。此梅を見乍ら一盃とはどうでござるナ。

石神　夫は結構望む所。結構それへお渡しとはどうで有馬の水天宮かな。

（ト車田の提げたる二升樽を鵜ノ森に渡す。是にて皆々床几へかける。石神有合ふ笥茶碗をとつて。）

蓮木　石神氏。此ぐい呑みで貴公からお初めなせえ。

石神　それは結構〳〵。

車田　ヲツト、それへお渡し申すはならぬぞ〳〵。

石神　ならぬなら、ならぬ旅籠屋三輪の茶屋とはどうでござる。

蓮木　イヤ道六どの。仲々洒落が上達でござるな。

鵜森　上達二日の初暮にはどうでござる。（トうたうてゐる。）

皆々　ハヽヽヽ。

蓮木　時に、何れも。下らぬ事を申して野郎ばかりの酒盛もさえぬではござらぬか。

石神　違へねえ。せめて茶屋の姐（あね）えでも居ればいゝが、こいつも留守ぢやア仕方がねえ。どうか小脛（また）の切上つた、水氣たつぷりといふ名婦人を生捕りてえものだ。

車田　何でも肴は刺身（さしみ）、酌は髱（たぼ）に限るテ。かういふ中も乙りきな代物（しろもの）が來さうなものだ。

鵜森　車田氏。かういふ事なら、貴

公の内儀を連れて來て、三味でも彈かせればよかつたになア。

石神　兎も角も咄しよりア、酒を流行らせよう。

皆々　其事〳〵。

（ト此樣な事を云乍ら、捨臺詞にて皆々酒を呑み居る。靜かなる唄、通り神樂になり、向うより娘お雪、振袖屋敷娘好みの拵らへ、後より下女お常、家中腰元の拵へ、若徒親仁宗助、白髪鬘茶木綿の無地の羽織、古びたる木綿袴、大小の拵らへにて附添ひ出て來り、花道にて舞臺を見て思入れあつて）

お常　モシ、お孃樣、御覽じませ。ようマア咲いたではござりませぬか。

娘　ほんに美しう咲いたわいなう。

（ト是にて、舞臺の四人を見てお常の袖を引く。）コレ〳〵常や。あそこにお侍樣の生醉がゐるわいの。氣味が惡いではないかいなう。

お常　ほんにさ樣でござります。ひよつと又、惡い戯談でもされると惡うござりますから、こりや後へ歸りまして裏道を參りませう。なア宗助どの。

宗助　何といはつしやる。お孃樣は何が怖いと仰つしやるのだ。

（ト大きな聲をするゆゑ、お常押へて、）

お常　コレサ、靜かにいひなさんせ。

（トお常、宗助に舞臺へ思入れをして囁く。）

おやによつて、裏道を廻つた方がよからうわいなア。

宗助　ナニ生醉だといつて怖い事があるものか。向うも武士ならこちらも武家のお娘御樣。滅多な事を致す事はござりませぬ。モシお孃樣。何も氣味の惡い事はござりませぬ。見ぬ振してお通りなされませ。

お常　宗助どの。よいかいなア。

宗助　ナニ遠慮なしに行かつしやりませ。

娘　そんなら、よいかや。

宗助　ハテ、宜しうござります。サア〳〵おいでなされませ。

（ト右の唄になり、本舞臺へ來る。此中四人は酒を呑み乍ら、娘を見て、いゝ娘だといふ思入れにて、囁いてゐる。娘腰元宗助は是に關はず、四人の前を行過ぎる。石神聲をかけて）

石神　ヲイ、父さん〳〵。待つて呉んな〳〵。

蓮下　姐さんも待つておくれ。ヲイ父さん。待ちなといふに。

（トいへども、宗助聞えぬ振にて、兩人へ關はず行けといふこなし。娘腰元は氣味の惡き思入れにて行きにかゝる。）

石神　ヲイ父さん。お前は耳が聞えねえのか。マア待つて呉んねえなア。丁度いゝ所だ。今おいら達が酒を呑むに肴がなくつて困つてゐた所だ。

車田　待てば甘露の日和とは此事だ。長くは置かねえ、少しの内だ。

鵜森　ヲイ。そつちの姐えもいゝぢやアねえか。そんなにびく／＼しなさんな。

蓮木　サア／＼二人乍ら、此處へ掛けなよ。コレサマア掛けなといふに。

（ト蓮木車田鵜ノ森三人にて、娘腰元を無理に引寄せるを宗助隔てゝ、）

宗助　アヽコレ貴樣達はとんだ人だ。往來の者を無理無態、手籠めに致すは慮外千萬。品によつたら其分には致さぬぞ。（トきつといふ。）サア／＼お孃樣。怖い事はござりませぬ。お常どの。そんな者に關ふ事はない。サア／＼おいでなさい／＼。

（ト四人の者を押分け、無理に連れて行かうとするを、石神、宗助を足にて蹴飛ばし、娘を引寄せる。蓮木はお常を、無理に突退け逃げようとするを又抱留いて口を吸はうとする。宗助いら立ち、中へ割つて入るを、車田鵜ノ森突退ける。宗助あくせくと氣をもめ共、年寄にて心に叶はぬ思入たよろしく。）

石神　コレサお娘。そんなに踠くにやア及ばねえ。じつとしてゐなといふに。

娘　アレモウ堪忍して下さりませ。お常。どうせう／＼ぞいなア。

蓮木　コレサお前迄が同じ様に、初心らしいぢやアねえか。

お常　宗助殿。どうぞして下さんせ。

（ト踠く。石神蓮木之を關はず、兩人の前へ手を入れようとする。）

娘
お常　アレエ／＼

（ト泣く。宗助も堪へ兼ねたる思入にて、）

宗助　年寄と侮り、餘りの法外。老朽ても身共も武士ぢや。覺悟しをれ。

（ト大拍子になり、宗助刀に手をかけ、拔きにかゝるを車田鵜ノ森、宗助を蹴倒して、）

車田
鵜森　エヽ老耄め。何をしやアがる。

（ト宗助よろ／＼し乍ら、又立掛るを、車田合口の木刀にて宗助の頭を酷く喰らはす。宗助アツト倒るゝ。娘腰元これを見て種々あせるを關はず、石神蓮木女形兩人を無理に引擔ぎ、一散に上手へ入る。宗助起上り、のり紅になり、遣らぬと立上るを車田鵜ノ森にて酷く蹴倒し、兩人は矢張り上手へ逃げて入る。宗助無念の思入れにて、よろぼひ／＼跡を追駈けて、矢張り上手へ入る。早めたる大拍子にて此道具廻る。）

本舞臺、高二重の土手眞中石段、此上へ寄せこ石の井筒、御神水と印したる高札立てあり、後(うしろ)に松の立樹、日覆より同じく釣り枝、向う八幡本社洞り宮の遠見、上下植込みの景物。すべて八幡段幌の體。矢張り大拍子にて道具留る。

(ト大拍子打上る。時の鐘、誂への合方になり、向うより八重垣紋三、深編笠着流し大小、浪人の拵へにて出で來り、)

紋三　誠や人の盛衰程、世に味氣なきものあらうや。來る春の日は變らねど、變り果てたる浪々の埋(うも)れし身の憂き事を、立願籠める神詣で、アヽまかせねばこそ浮世ぢやなア。

(ト又合方になり、本舞臺へ來り、石段へ上りにかゝる。此時バタ／＼激(はげ)しく上手にてわや／＼人聲のする。紋三思入れあつて、)

ハテ騒がしきアノ人聲。定めて喧嘩口論ならん。

(ト佇み居る。又バタ／＼、大拍子になり、上手より以前の人數娘を捲き出て來る。是にて腰元お常すがり乍ら出て來る。後より宗助よろぼひ／＼追駈け出て來る。此體を見て紋三片隅へ寄る。皆々本舞臺へ下り、娘を無理に引張つて行かうとするを振拂ひ、思はず紋三の後へ廻るを、石神紋三を突退け、)

石神　エヽ邪魔な野郎め。どきやアがれ。

(ト紋三を突退け行かうとするを、紋三其手を捩上げ、)

紋三　こりや理不盡な。何とめさる。武士たる者の刀の柄へ手をかけて、無禮至極。アノ妾な、狼藉者めが。

(ト石神を突放す。娘とお常宗助はうろ／＼として紋三の傍へ寄つてゐる。)

石神　ヤイ／＼／＼要らざる所へ出やアがつて、見りやア大小手挾んで深編笠の浪人者。

蓮木　手の內でも欲しいのか。我々(ほう)共が帶したる此大小が目にやア入らねえか。

車田　惡く邪魔立てひろぐが最後、笠の臺の生別れ。

[illegible]　危(あぶ)ねえ所へ出ようより、破れ扇で高砂や、此裏道を門附けて、貰つて歩くが、上分別。

(ト皆々紋三へ惡口する。娘並にお常宗助は紋三の袖にすがり、)

娘　御覽の通り手籠めにあひ、行きも行かれぬ此場の仕儀、

お常　お武家樣とお見受け申しましてのお願ひ、私は兎も角も、お孃樣のお身の上、

宗助　此親仁めをお助け下さると思

召し、どうぞ此場を逃(のが)れますやう、

娘　お慈悲にどうぞ、

お常　われ／＼を、

三人　お助けなされて下さりませ。

（ト紋三にすがり頼む。紋三迷惑なる思入れ。）

四人　ヤイ／＼／＼何をぐず／＼ぬかすのだ。

石神　うぬ。邪魔でもすると、

四人　叩き挫くぞ。

（トロ々にいふ。此時紋三笠を取り、）

紋三　イヽヤお邪魔は仕らぬ。此者になり代り、お詫びを仕る。

四人　何と。

紋三　サア何の仔細か存ぜね共、あれは女子と老人ばかり、余り彼等が不便さゆゑ拙者が代つてお詫びを申す。武士は相身互ひとやら、御了簡下さらば彼等が仕合はせ、此身の大慶、何卒御用捨下されい。

（ト紋三、両手をつき詫びる。）

石神　成程、こりやア貴様の言ふのも尤だ。先が女や年寄だから相手にならぬと申すか。

蓮木　こりや面白い。そんなら貴様、あの者になり代り相手になつて立會はつせえ。

車田　ヲヽ、さうだ／＼。娘や親仁に代るとあらば、

鵜森　キリ／＼相手に、

四人　ならつせえ。

紋三　是は思ひもよらぬ其仰せ。柔弱非力(にうじやくひりき)の拙者めに、何れも方のお相手等とは、中々以て。此儀は御免下されい。

石神　イヽヤそりやならぬ。此方共が相手をば、中へ入(はひ)つて扱ふからは、相手になるは覺悟であらう。

蓮木　但しは此方共が怖いのか。貴様も両刀手挟めば武士ぢやアねえか。

車田
鵜森　是非共相手に、

四人　致さにやアならぬ。

紋三　ひたすら其儀は御了簡。

四人　イヽヤならねえ。相手になりやれ。

紋三　スリヤどうあつても。

四人　くどいわえ。

紋三　ア是非に及ばぬ。此場に於いて貴殿方の一刀の下に命を捨つるも前世の約束。仰せに任せ、お相手になるでござりませう。

石神
蓮木　そんならいよ／＼、

車田
鵜森　相手になるか。

紋三　お望みに任せ。

四人　面白い。サア支度をさつせえ。

(ト合方になり、石神蓮木車田鶉ノ森上下へ別れ、皆々下諸にて襷を掛け、支度をする。紋三も立上る。此前方より娘お常宗助氣をもみ居る。此時前へ出て、)

娘　私共が難儀をばお願ひ申した此場の仕儀。ひよんな事になりましたわいなア。

お常　何を申すも女子の事。頼みに思ふ男と申すは御覽の通り年寄なれば、お願ひ申した浪人樣。

宗助　老朽ちました此親仁の命を捨つるは厭ひませねど、お連れ申した此女中は主人の娘御、弱味をつけ込む無法者。此納りが何共以て。

娘　コレお常宗助。

お常宗助　お孃樣。

三人　どうしたら宜からうぞいなア。

(ト三人思入れあつて泣伏す。)

紋三　アイヤ其心配には及び申さぬ。かくなり行くも約束事。刀の手前武士の意地。イヤ何、御老人。女中方を怪我せぬやう、氣を附けて下され。

宗助　ハイ〳〵有りがたうございます。

(ト宗助、紋三の姿を見て。立派な侍ぢやといふこなし。紋三も身拵へをする。娘も紋三に見とれてゐるを、お常種々氣をもみ、娘に指圖をして扱帶をといて襷に貸してやれといふこなし。娘心得、緋鹿の子扱帶をといて紋三に恥づかしさうに渡す。お常種々介錯をし乍ら、敵役の方を見て、今に見ろといふ思入れ。此中皆々宜しく思入れあつて、紋三扱帶を襷にかけ身拵へして前に出て、)

紋三　お支度よくば。

四人　心得た。

(ト三味線入り、誂への鳴物になり、車田鶉ノ森双方より切つてかゝる。紋三心得切結ぶ。よき程に石神蓮木眞中へ打つて出る。四人宜しく段幔の土手を小居に立廻り、此中娘並にお常は危いと氣をあせる思入れ。宗助も褄股立をとりよろ〳〵し乍ら、前へ出ては女形二人を構ひ、井筒の圍を三人にて廻り乍ら氣をもむ。此中種々好みの立廻り、四人は上下へ別れ、紋三を眞中にてキツト見え。是にて鳴物變り、激しき早切りの立廻り、トヾ四人を切倒し、紋三刀の血を拭ひ、ほつと思入れ。娘並にお常宗助も前へ出て、思入れあつて、)

お常　是は〳〵何れのお方樣か存じませぬが、私共主従の者、恥かしめをうけるところ。

娘　危い難儀をお助け下されまして、何と御禮を申上げませうやら。

宗助　下郎もお蔭樣で命拾ひを致しまして、此様な悦びはございませぬ。(ト紋三の態を見て、)然し乍ら御侍

樣には何處も御怪我はござりませぬか。

（ト氣遣ふ思入れ。紋三宗助を見て、）

紋三　イヤ手前よりは其許、見れば數ケ處の其手疵、隨分共に御養生なさるが宜しうござる。

宗助　イエ〱ほんの鵜の毛で突いた程、些細な事でござります。此位な事ですみましたも皆貴方樣のお蔭でござります。

お常　重ね〱の御親切。

三人　お有難うござります。

（ト三人手を合はせ紋三へ禮をいふ。紋三こなしあつて、）

紋三　改まりし其お詞。各々方の御難儀の場處、拙者折よく通り合せ、見るに忍びず此仕合せ。お救ひ申すは武士の本意。何のお禮に及びませう。

宗助　どう仕りまして。お孃樣始め私共迄、お助け下さりました貴方樣、仲々口でお禮は申し盡されませぬ。

お常　ホンニさうでござんす。どうか御禮の致し樣もござりませうに、何を申すも此處は途中、せめて、お屋敷迄御同道申したうござりますなア。（ト思入れ。）

娘　ヲヽそれがよい。さうして父樣から御禮を言つてお貰ひ申さうわいの。

宗助　成程。それが宜しうござりまする。

娘　そんなら、常。早うお連れ申してたも。

お常　ハイ〱、畏りました。（トお常紋三に向ひ、）申し。貴方樣。今日は段々とのお情け。何と御禮の致しやうもござりませぬ。それにつきまして、貴方樣を手前主人の屋敷まで、お伴ひ申せとある、主人娘の申附け、何卒御同道なされて下さりませ。

（ト此中、紋三始終思案の思入れ。）

紋三　お志は忝うはござれども、御覽の通り四人の者手にかけしは拙者が科。此儘に打捨ておけば、後のとがめ、却つて情が仇となり、各々方の難儀となれば勞して功なく、手前が寸志も水の泡、拙者はこれより、當處の代官へ名乘り出で、仕置を受くる覺悟でござれば、各々方にはお構ひなく早く此場をお歸りなされ。

（ト立上る。お常娘左右にすがり、）

娘　ア、モシ、其難儀も我々ゆゑ、どうまア見捨てゝ歸られませう。

お常　一先づ手前が主人の屋敷迄御同道下さりませ。又致しやうもござりませう。

紋三　イ、ヤ、時刻移れば此身の遲れ。是より直に代官所へ。

（ト紋三兩人を振放し、ツカ／＼と行きにかゝる、此時上手にて、）

武太夫　アイヤ、其御屆には及び申さぬ。

紋三　何と。

（ト紋三キツト思入れ。合方になり、上手より蔭山武太夫、袴衣裳大小にて少しふけたる拵へ、若い衆、中間附き出て來り、）

武太夫　最前よりの一部始終、篤と見聞仕つた。扨、驚入つたる貴殿の御手練。義を見てせざるは勇なし。武士はかくこそありたき事。拙者事は大江の藩中、蔭山武太夫と申すもの、事の仔細は此方より貴殿の難儀にならざるやう、代官所へ屆け申さん。

（ト之を聞き、紋三下に居て、）

紋三　是は／＼御懇志の其御詞、忝う存じまする。拙者事は下總結城の浪人、生兵法も身のたづき、不鍛練なるにはござれども、八重垣流の奥儀を極はめ、即ち流儀を苗字に呼び、八重垣紋三と申しまする者、御覽の如く唯今の仕合はせ。惡者とは申せ共、帶劍なさば武士の端くれ、此儘にも捨置かれず、名乘り出でんと存ぜし所、情ある貴殿の御詞。

武太夫　往來を惱ますあばれ者、切つて捨てしは貴殿の働き、及ばず乍ら此場の一埒、拙者證人に罷立ち代官所へ屆け申さん。

紋三　何卒、貴殿の御取計らひ、萬事宜しく願ひ申す。

武太夫　必ず共に御心配なく、武士の情は相身互ひと申すもの。

紋三　袖振合はすも他生の御緣。

武太夫　以後は別懇。

兩人　申し談ずるでござらう。

（ト兩人宜しくあつて、武太夫三人に向ひ、）

武太夫　御身達も災難とは申し乍ら、よいお人がござつた故、恥かしめを受けぬは此方衆の仕合せと申すもの。此場は拙者が引受ければ安堵して歸らるゝが宜しうござる。

お常　有りがたう存じまする。どう

なる事と存じましたに、よい所へお侍様がおいでなされまして、此樣なお嬉しい事はござりませぬ。

宗助　下郎も安堵致しましてござります。

娘　此上ともに貴方樣。宜しくお頼み申します。

（ト武太夫へ一禮をなす。武太夫承知ちやと頷き、）

武太夫　イヤ何、紋三殿、其許には御浪人と承り、チトお願ひの儀がござるが、何とお聞濟み下されまするかな。

紋三　コハ改めし貴殿の御詞。何が扨、今の大恩、某身に叶ひし儀なれば。

武太夫　御得心下さるか。

紋三　如何にも承知致してござる。

（ト合方替って、武太夫思入れあって、）

武太夫　其お頼みとは餘の儀にござらぬ。拙者が主人大江因幡之介へ御推擧申したいが御仕官は下さるまいか。

（ト是を聞き紋三も思入れあって、）

紋三　ハ、御親切なる其御詞。御恩の上に重なる御恩。數ならぬ身を左程迄有りがたき貴殿の御推擧。拙者身にとり何程か大慶至極に存じまする。

武太夫　スリヤ御得心下さるとな。

紋三　寄るべ頼りもござらぬ拙者、偏にお世話頼み存ずる。

武太夫　早速の御得心。拙者に於いても祝着至極、幸ひ今日若殿當社八幡宮へ御參詣。唯今別當所にて御休息なれば、善は急げ、是より直に御同道仕らん。御目見え致されよ。

紋三　御前宜しうお取做し。然し御覽の如く、亂髮ゆゑ上への恐れ。

武太夫　其儀は心配召さるゝな。髮取上る者もござれば、別當方にて何かの支度を。

紋三　何から何迄、貴殿の御厚志。萬事宜しう頼み存ずる。

（ト武太夫紋三立上り、紋三身繕ひしてゐる。娘並にお常宗助思入れ。）

娘　此處に父樣がおいでなされたら、今日のお世話を御縁としてこちのお屋敷へ御取持ち致さうもの。

お常　ホンニお殘り多い事でござりまする。

（ト兩人本意なき思入れ。宗助思入れあって、）

宗助　ア、是か。所謂緣無き衆生。扨、お侍樣。今日は段々とお世話樣に預りました。これより屋敷へ歸りまして、仔細を主人へ物語り、何れお禮に參上致すでござりませう。

紋三　イヤ〳〵決して夫には及び申さぬ。日暮れぬ中に少しも早う歸らるゝがようござる。

宗助　ヘイ〳〵御詞に隨ひまして、此儘お別れ申しませう。

（ト三人宜しく一禮なし立上る。娘は紋三へ思入れあつて、）

娘　とはいへ、彼方（あなた）へま一度御禮を。

（ト娘は紋三の方へ行くを、）

お常　ア、モシ。

（ト隔てる、武太夫こなしあつて、）

武太夫　さ樣でござらば、紋三殿。

紋三　武太夫殿。

武太夫　イザ御同道仕らう。

（ト唄になり、武太夫先に紋三中間附き、上手へ入る。後、合方、時の鐘。娘うつとりと紋三を見送りゐる。宗助は娘を手拭にて結びゐる。お常は娘へ思入れ。）

娘　テモお優しいお侍樣。

お常　ホンニもう、御心立なら、殿振りまで。

娘　よい殿御ではないかいなう。

（ト娘恥かしきこなし。扇にて顏を隱す。此時、宗助眞中へ出て、）

宗助　何と御意遊ばします。

（トお常心附き、）

お常　イ、エイナ、殿樣がお案じてあらうと申しますいなア。

宗助　ホンにさうでござります。殿樣も奧樣もさぞお待兼ねでござりませう。

お常　サア〳〵お孃樣。日のたけぬ中、お早うお歸り遊ばされませ。

（ト娘矢張り見送り居るゆゑ、お常宗助氣遣ひの思入れにて、娘の手をとり、）

是はしたり、早うお歸りなさりませぬかいなア。

娘　エ、モ、忙（せは）しない。今行くわいなう。

（ト早い合方になり、お常娘をせり立て乍ら、宗助附き向うへ入る。矢張り早く右の合方にて、向うより親仁佐五兵衞、世話形（なり）股引草履。無器用に頰被りをして、直に舞臺へ來る。上手より以前の求女出て來り、双方行當り、恂りなし、）

親仁　是は〳〵、御免下さりませ。チト考へ事を致し乍ら歩きましたゆゑ、不調法致しました。眞平御免なされませ。

（ト両人顏見合せ、）

求女　ヤ、お前は父様ではござりませぬか。

親仁　ヲ、そちは稱名寺へお預け申した悴喜之介。やれ〳〵久しう逢はぬが、變る事はなくてめでたい〳〵。

求女　お前も何時も御達者でお目出度うござりまする。それはさうと、父さん、今承れば考へ事をしてお歩きなさるとの事。何ぞ苦勞な事ではござりませんか。

親仁　イヤ何も案じる程の事ではない。何はともあれ、こゝへ掛けやれ。（ト兩人有合ふ物へ腰を掛ける。合方になり、）扨、われも知つての通り、そちが母が長の煩ひ、貧乏暮しに仕方無く、其方を不斷花の御得意稱名寺樣へお願ひ申し、又娘のお小夜は大磯の廓へ質にやり、一月たつても請戻さう二月たつてもと朝夕に、身貧な中でも夫ればかり、苦勞にしてゐる其中に、ツイ婆が往生して、請ける事もならぬ仕儀。ツイ夫なりにて今では女郎。而も扇屋の內で十六夜というて隨分相應に客もあるさうなわい。

求女　夫は宜しうござりまする。私も姉さんにお別れ申した其後は、互ひに奉公の身の上ゆゑ、問音信も致しませぬが、變る事もござりませぬか。

親仁　別に變る事もないが、姉の客に極樂寺の僧侶清心殿といふが深いなじみ。阿古義が浦に引網で、度重つて、何時か顯はれ、ツイ女犯の其科で入牢さつしやつて永の糺明、聞けば明日は赦免との事。是まで姉を始め繋がる緣とてわしに迄、心附けして下された清心殿ゆゑ、せめてもの御恩返し、金拵へて御追放の身の置處をと思へども、身貧な中で出來ぬは金、どうしたものと昨日からふつら〳〵と步いてゐれど、扨借りる當もなし眞に當惑してゐるわい。

（ト求女これをきゝ、さつきの金があつたなら、よかつたといふ思入れ。）

求女　シテ其お金はどの位あればよいのでござります。

親仁　そりや、先から呉れといふのではなし、こちの志で上げるのだから、例へば五十兩でも、又五兩でも志は同じ事ぢや。

求女　どうか都合してあげたいけれ

ど、我身迄も才覺の當もなし。アア斯ういふ事と知るならば、最前のあのお金戻さずに置いたなら、今の役に立たうもの。今更呉れと行かれもせず。アヽ困つたものだやなア。

(ト獨ごとの樣にいふ。兩人當惑の思入れ。)

親仁　何を云うてももう明日の事。おれも詮方盡きた故、姉の所へ相談に往たれ共、是迄も勤の身、今が今に都合も出來ず。然し、穢れた著物をば、お着替へさせ申さんと、着る物だけは姉の方から寄しました。是が一つの安堵ぢやわいの。

求女　何に致せ、淸心樣、御噂には聞いてゐれど、未だ御目にも懸らず、御氣の毒なる御身の上、姉樣ゆゑの御難澁、係りや繫がる弟の私、どうかして明日迄に、金拵らへて進ぜたいものぢやなア。(ト思案のこなし。)

親仁　思ひ餘つて金の才覺、われ迄に苦勞をかけ年效もない親ぢやと必ず恨んでくれるなよ。

(ト淚乍らにいふ。求女も落淚の思入れ。)

求女　勿體ない事仰つしやりませ。たつた一人の親仁樣。貴方ばかりに御苦勞させ、御病氣でも出ましてはなりませぬ。どうか明日迄都合が出來ましたら内へ持つて參じませう。

親仁　何の出來ずとも大事ない。此樣な苦勞をして、われこそ煩うてはならぬぞよ。

求女　イエ〱煩ふ事ではござりませぬ。(ト求女立上り、)さやうなれば父樣。明日迄には何れ御返事致しませう。

親仁　ヲ、われももう行くか。

求女　ハイ、是でお別れ申しまする。

親仁　隨分御奉公大事にせいよ。

求女　有りがたうござりまする。

(ト求女向うへ入る。親仁は見送り思入れあつて、)

親仁　ア、苦の娑婆とはよういうたものぢや。娘が緣で淸心樣の難儀をお助け申さうと、才覺の話をばふつと話せば、弟めが年端も行かぬに苦勞をして、出來ぬ乍ら案じをるとは、親は泣き寄り、ア、つまらぬ事をいふ中に、もう日暮も近し。又日が暮れると物騷な。(ト思

入れあつて立上り。）アどうか金が。

（ト時の鐘、風呂敷包を背負ひ乍らよろよろとなる。）

もう入相ぢやさうな。

（ト親仁宜しく思入れあつて時の鐘の送りにて、此道具廻る。）

本舞臺三間、常足の二重。後金襖、前側欅欄間、上下杉戸。二重眞中に幕明の因幡之介、蒔を歎き脇息に掛り、左右幕明の臺藏主水中通り近習二人宛上下に別れ、後に腰元四人控へ、平舞臺上の方に順齋、下手に以前の武太夫、此次に紋三控へ居る。すべて鎌倉八幡別當所上段の間の模樣。謡への合方にて此道具留る。

主水　ハツ唯今申上げまする通り、武太夫が推擧召されし八重垣流の遣ひ手、御指南番にはよき御家來。御引合せの仕りまする。

（ト平伏する。因幡之助紋三を見て、）

因幡　萬卒は得安く一將は得難し。武太夫が推擧の浪士八重垣紋三とやら、不足にも思はんが三百石にて予が家來に召抱へん。

紋三　ハヽ不肖なる拙者め、冥加至極、有難く頂戴仕りまする。（ト平伏する。）

因幡　早速乍ら過分〳〵。予も滿足に思ふぞ。

主水　ハヽハツ、幸ひ君の御慰み。紋三殿。此場に於いて一試合、手練の程を御覽に入れられよ。

紋三　ハツ。拙き武術に候へども御奉公の手始め、未熟の一ト手御覽に入れるでござりませう。

主水　誰かある。奉納の竹刀を是へ。

近習　ハツ。（ト竹刀を持來り、よき所へ置き、控へる。）

因幡　こりや一興ぢや。然し紋三が相手には誰が宜しからうな。（ト邊りを見廻り、臺藏を見て、）それに居る牛窪臺藏。是なる紋三と立合ひ致せ。

（ト臺藏迷惑なるこなしにて、）

臺藏　仰せ畏つてはござれども、此程よりの雪より、疝積に腰が引つり、チト試合は致し難うござれども、若殿の御意故相手には罷りなるが、もし負けても何れも方、必ず共にお笑ひあるな。身共が負けるのではござらぬ。疝氣めが負けるのでござるぞ。

（トいひ乍ら前へ出る。腰元臺藏を見て、）

腰元○　日頃からの高慢にお似合ひにならぬ臺藏様。

腰元△　强さうなお顏をしてお卑怯な

其お詞。

腰元口　御自分のお弱いのをとり置いて、

腰元×　御病氣のせいになさるゝとは、

四人　笑止な事でござんすわいなア。

臺藏　イヤ／＼拙者が弱いのではござらぬ。全く病（やまひ）の業でござる。其證據には腰が震へてなりませぬ。

（トぶる／＼震ふ。順齋見て）

順齋　臺藏殿。貴殿のは疝氣ではござらぬ。そりや持前の中氣でござる。

臺藏　何を馬鹿な。（ト順齋をにらむ。）

主水　双方共に仕度を召され。

紋三
臺藏　畏つてござりまする。

（ト白囃子になり、兩人身拵へなし、互に一禮なして）

紋三　イザ、

臺藏　イザ、

兩人　イザ／＼

（ト兩人竹刀を取上げ立上り、キツト見え。三味線入り白囃子になり、兩人宜しく立廻りあつて、トヾ臺藏竹刀を打落され、うろたへるを紋三臺藏を散々に打据ゑる。）

臺三　ア、參つた／＼。何れも是は疝氣でござるぞ／＼。ア、順齋老。何ぞ藥はないか／＼。

順齋　承知仕つた。愚老揉んで進ぜませう。（ト順齋、臺藏の腰をもみ／＼して）こゝでござるか／＼。

臺藏　そこでござる／＼。其疝氣めが負けたのでござる。

（ト兩人をかしみ宜しくあつて控へる。）

因幡　天晴なる紋三が手の內、此上は誰を相手にしたものぢやな。

（ト主水へ思入れ。主水こなしあつて）

主水　紋三と立會ひ致す者、御家來多き其中に蔭山氏の御子息繁之丞殿、武術の名譽と家來の取沙汰。

侍〇　いか樣、御若年にはござれども、先生のお仕込み。

侍△　仲々もつて吾々共の及ばぬ事。

侍口　紋三殿と繁之丞殿の御手合せは、

侍×　若殿樣にも一段のお慰みにござりませう。

因幡　して、繁之丞には何れにをる。

主水　今日御祈念の終る迄御名代として神前にて奉幣の御役目。

因幡　誰かある。繁之丞を是へと申せ。

近習　ハツ。

（ト立かゝる。此時向うにて、）

繁之丞　アイヤお召しに及ばぬ。蔭山繁之丞、只今それへ。

（ト誂への鳴物になり、向うより繁之丞裃衣裳大小にて出て、花道に平伏なし、）

我君の御召しに應じ、何れも方の其中へ、未熟な身をも顧みず、斯く有難き御目見え。猶此末共に親共同樣。何れも樣の御引立、偏に願ひ上げ奉りまする。

（ト始終本舞臺と見物へ思入れあつて、）

因幡　苦しうない。近う／＼。

近習四人　若殿のお召し、急いで是へ。

繁之丞　眞平、御免下さりませ。

（ト右鳴物にて繁之丞本舞臺へ來り、宜しくすまふ。鳴物打上げ合方になり、）

因幡　只今其方を呼出せしは餘の儀でない。是なる紋三と其方とはよき手合せと存ずる故、予が所望致す。此處にて立會つて見せやれ。

繁之丞　ハツ。御意に悖るは恐入れど、未だ若年の某、歷々の御相手等とは思ひもよらず。此儀只管御高免なし下されませう。

藝藏　御辭退召さるは繁之丞殿にも御疝積でござるか。兎角疝積がはやりまする。御大事になさるがよくござる。

順齋　疝積なれば愚老が得手物。揉んではつて即座に癒す長崎一流桂庵散膏藥。（ト大きくいふ。）

因幡　兩人控へい。

順齋藝藏　ハツ

（ト兩人控へる。武太夫思入れあつて。）

主水　イヤ何、繁之丞殿。辭退は却つて不忠の本、勝つも負くるも時の運、若殿の御意でござれば立會ひ召されい。

繁之丞　强ての御所望背くは御不興。御免を蒙り御相手仕るでござりませう。

主水　それ。双方共に支度召されい。

紋三繁之丞　ハツ。

（ト平伏する。白囃子になり、兩人身拵へして、紋三繁之丞前へ出て、兩人思入れあつて、）

繁之丞　是は／＼紋三殿とやら、始めて御意得申す。某事は蔭山武太夫が倅、同苗繁之丞と申す未熟者。御稽古願ひ奉る。

紋三　拙者事は御親父蔭山氏の御推擧にてお抱へに相なりし八重垣紋三と申す者、御見知りおかれ下されませう。

（ト兩人、一禮宜しくあつて、）

然し是は私の御挨拶。其許樣にも

御猶豫なく。

繁之丞　いふにや及ぶ。

紋三　イザ。

繁之丞　イザ。

兩人　イザ〳〵。

（ト兩人竹刀を取上げ、双方へ別れてキツト見え。三味線入り白囃子になり、兩人宜しく立廻りあつて紋三わざと竹刀を打落され、たじろぐ所を繁之丞紋三を打つ。皆々見て、）

因幡　繁之丞出かす〳〵。

皆々　イヤお手柄〳〵。

繁之丞　時の拍子に、思はずも拙者が勝を得ましたは面目もござりませぬ。

（ト平伏する。此時武太夫、ツカ〳〵と立つて繁之丞を引附け、扇にて散々に打ち、突放す。繁之丞キツト居直り、）

こりや父上には何故の御折檻。

武太夫　何故とは狼狽者。唯今の勝利、誠の勝と思ひをるか。紋三殿には我悴と聞き、勝を譲りし太刀筋に心も附かず、打つといふは、言ふやうなきうつけもの。さやうな狼狽へた根性にて、君のお役に立たうと思ふか。アノ妄な大たわけめが。（トキツトいふ。）

繁之丞　重々の不調法、恐入りましてござりまする。

武太夫　以後をきつと窘みをらうぞ。

（ト此中、紋三思入れあつて、）

紋三　アイヤ武太夫殿。さに非ず。中々以て御子息の武術我々如きの及ばぬ所。流石は蔭山氏の御仕込み。御若年の御手の内には恐入つてござる。

（ト之をきゝ、因幡之介感心のこなし。）

因幡　ホヽヲ、互に誇らぬ兩人が心底。末頼もしきよき家來。こりや主水。差古したれど予が差替。兩人へ褒美に取らせい。

近習　ハツ

（ト大小を持來る。因幡之介取つて、）

因幡　刀は紋三、差添は繁之丞へ、當座の褒美。

（ト主水取次ぎ、）

主水　我君よりの御賜物、有難く頂戴召され。（ト兩人へ渡す。）

武太夫　是は〳〵存じよらざる君の御褒美。

紋三　仰せは重き賜物。

繁之丞　冥加に餘る身の仕合せ。

武太夫　推擧致せし拙者迄、

紋三　有難く頂戴、

三人　仕りまする。

（ト三人宜しくあつて控へる。因幡之介思入れあつて、）

因幡　聞けば、武太夫には娘ある由。未だ目通りは致さね共、似合相應のよき縁談。是なる紋三の妻となし、永く一家の因みを結んでよからう。

武太夫　こは有難き御意。拙者めも先刻より斯くと存じをつたる所、お許し蒙り大慶至極に存じ奉る。

臺藏　家中一同噂の高きお柳殿、女房とはハテ羨ましい儀でござる。

（ト少し腹の立つ思入れ。）

順齋　ヤレ〱牛窪殿が涎をたらし、見込んでござるお柳殿、今日から紋三殿の御内儀とは。アよい男には生れたいなア。（ト順齋眞面目にいふ。）

因幡　主水は我に替り媒介の致し遣はせ。

主水　畏りてござりまする。

紋三　重々のお惠み、有難う存じまする。

（ト平伏なす。此時、因幡之介紋三を不意に打てといふ思入れ。扇にて指圖する。中通りの近習四人心得、竹刀を持ち立上り、）

近習四人　紋三殿。御意でござる。

（ト四人一時に打つてかゝるを、紋三扇にてあしらひ左右へ投退ける。又掛るを竹刀を一時に打落し、紋三四人を遠當てに當てる。四人美事にかへる。因幡介之を見て、）

因幡　ホヽ、ヲ美事。

紋三　ハツ。

（ト平伏する。武太夫扇を開く。双方一時に木の頭。）

武太夫　イヤお手柄〱。

（ト武太夫扇にてあふぐ。臺藏落ちたる竹刀を取上げ、紋三へ打つて行くを、粂之丞臺藏を手早く突廻しキツト留める。因幡之介は脇息にもたれ、皆々紋三の體を見て感心のこなし。此見え誂への鳴物にて、）

よろしく幕

第一番目四立目

山井ケ濱の場
稲瀬川の場

（花街模樣薊色縫の序幕なり。略す。）

小袖曾我薊色縫

第一番目五立目

八重垣新宅の場
大江家馬場の場
同 塀外 の 場

一妻木逸之進
　　　　　小團次
一鬼坊主淸吉
一薩山武太夫　　三十郎
一八重垣紋三　　權十郎
一薩山繁之丞　　訥升
一夜蕎麥賣仁八　又太郎
一醫者古池順齋　村右衞門
一妻木の若徒宗助　國太郎
一塚本主水　　　橘之助
一薩山の若徒國平　國之助
一
一武太夫娘お柳　粂三郎
一妻木腰元お常　市之丞
一逸之進娘お雪　歌女之丞
一家中娘おせき　三之助
一同　おなか　　武次郎
一

本舞臺三間、常足の二重。向う中形の襖、上手一間障子屋體。下手建仁寺垣、いつもの門口八重垣紋三と云ふ表札。總べて大江家中の體。爰に醫者の順齋、家中の娘おさんおたけ兩人、銚子へ女蝶男蝶を附けて居る。若徒の三平控へ居る。端唄、通り神樂にて幕明く。

順齋　これは大關氏岩島氏の御息女達。今日は當家御婚姻の御手傳ひ御苦勞でござる。

おさん　何の御役にも立ませぬけれど、日頃からお仲のよいお柳(りう)様の御婚禮、私共もあやかりますやうお酌を致しますのでござります。

おたけ　昨日俄に殿様へ御仕官なされた八重垣紋三様、御上より御指圖にての御緣組。

三平　イヤもう御新宅開きやら、御婚禮やら、私獨りで打つたり舞つたり、御二人様て御手傳ひ下されますのでやう／＼仕度が出來ましてござります。

順齋　是が卽ち町家で申す引越女房。壁に馬を乘かへた婚姻、花聟の紋三殿は當時御家中で並ぶ者なき男振といひ、殊に八重垣流の達人、よい聟をまうけられ、武太夫殿はお仕合せ、お柳殿は尙仕合せ。定めし朝も晩もひとつにひつ付き、ちん／＼かもの入れ首出し首、紋三殿の顏の細(ほそ)るが見える様でござる。

おさん　其の様な美しい殿御のお嫁におなりなさるお柳さんは、ほんに御運のよいお方。

おたけ　御祝言をなされましたら、嘸やお仲もよろしからうと、誠にお羨しう存じます。

三平　皆様の仰つしやる通り、其當座は箕箒の鍼がなると申す古い川柳點にある通り、思ひやられた事でござります。

順齋　イヤ、愚老も若い時、妻を呼びました節に、此肥りました顔が、ほつそりとなり、顋で蠅を追ひましたが、齢をとるにしたがひ、肥え肥りまして、腹がかやうにふくれて居るから、自分の前のものは遂に見た事がござらぬ。ハヽヽヽ。

おさん　順齋様の御戯談ばかり。

おたけ　ほんにをかしいお方でござりますな。

順齋　シテ、武太夫殿は最早お出でなされたかな。

三平　藤山様は御子息縈之丞様塚本主水様御同道で、押附けお出でゞござります。

（ト唄になり、通り神樂にて向うより三立目の役藤山武太夫、共袴大小、縈之丞麻上下主水同じく袴大小、中間附き出て、直に舞臺へすつ、）

武太夫　賴たう。藤山武太夫でござる。

（ト三平、門口をあけ、）

三平　これは藤山様。先刻より主人の御待兼ね。まあ／＼御通りなされませ。

武太夫　サ、塚本どの。

主水　まづ／＼、其許から。

武太夫　然らば御免下され。

（一ト合方にて、武太夫に兩人付き上手へ通る。中間は下手へはひる。奥より主人女房お源禰襠にて出で、よき所にすまふ。）

お源　これは／＼武太夫様、只今お出でゞござりまするか、今日はお日柄も宜しく御目出度く存じまする。

武太夫　これは塚本氏の御内室、此度は娘事を御懇切に御世話下され、御蔭にて今日の婚姻、大慶に存じます。扨、順齋老にも何かと御世話下され、忝う存ずる。伜、ようお禮を申しやれ。

縈之丞　古池様。此度姉の婚姻に附き色々御世話下され千萬有難う存じまする。

順齋　これは／＼痛み入る御挨拶。サヽお手上られい／＼。扨、萬端滞

りなく今日の婚姻、貴殿にも嘸満足にござりませう。また塚本殿には御役目御苦勞に存じまする。

主水　是は御挨拶。身不肖なる某、有難い主君の嚴命、殿の御名代として媒介(なかうど)の役目仰付けられ、冥加至極もない仕合せ。

お源　不調法がちなる私共、殿様の御指圖にて身に餘りましたる今日の役目、御免なされて下さりませ。

おたけ　數ならぬ私共た、待女郎やら介添やら。

おさん　俄の事故不束がち。藤山様、お柳さまの御婚禮さぞお嬉しうござりませう。

武太夫　イヤモ、御察し下され。昨日今日迄乳母に抱かれ居つた娘が嫁入り、塚本氏の御内室の御世話にて鐵漿(かね)をつけました上は、見違ひる様になりませう、畢竟娘がござればこそ八重垣紋三といふよい伴を設け、我片腕に、（ト云かけ、思入れ。）イヤ持つべき者は子でござるて。

順齋　武太夫殿の仰せらるる通り子供の成人は早いもの、お柳殿の小さい時愚老がだつこ致し、度々膝の上へしいをなされたて、其上アノ可愛らしい頰ぺたを愚老がペチヤ／＼となめれば、又愚老がふくれた所をお柳殿がなめられ、あちらでもこちらでもペチヤ／＼となめ合つた事がござつた。ハ、、、。

お源　順齋様。其様な事を仰しやりますな。お柳さんがお聞きなされたら嘸お恥かしうござりませう。

おさん　左様でござります。誰しも小さい時の事を申される程、恥かしい事はござりませぬわいなア。

紫之丞　それは格別、親人奥へお出でなされ、御用意なされませぬか。

武太夫　いかさま、紋三殿に面談致さう。然らば塚本殿御夫婦。

主水　御同道致すでござりませう。

お源　左様なれば何れもさま。

武太夫　然らば順齋老。

順齋　ドレ御案内致さう。

（ト唄になり、此人數奥へはひる。三千、そこら片付けて居る。爰唄通り神樂にて、向うより妻木逸之進、ふけたる拵へ、羽折袴大小、同じく娘(なの)お雪下女お常若徒宗助、何れも三立目の形、進物の風呂敷包を持ち、出で来る。）

逸之進　只今宗助に門番で聞かせたれば、八重垣の宅は新らしい長屋の

門ぢやと申したから、大方向うで
あらう。
お常　左様でござります。モシお雪さま。嘸お嬉しうござりませうなア。
お雪　是が嬉しうなうて。早う御目に掛りたいわいなう。
宗助　紋三様にお會ひなされました上は、たんと御禮を仰しやりませ。
逸之進　サア〳〵來やれ〳〵。
（ト右鳴物にて四人縁臺へ來り、）
宗助。案内いたせ。
宗助　ハイ〳〵、畏りました。（ト宗助門口へ來て、）お願ひ申します〳〵。
三平　どうれ。どちらからござりました。
（ト三平門口を明ける。）
宗助　八重垣紋三様は御在宿でござりますか。
三平　在宿でござりますが、取込んで居るが何御用でござります。
（ト逸之進門口へ來て、）
逸之進　イヤ苦しうない者、手前は稲毛の藩中でござるが、一昨日鶴ケ岡にて是なる娘が難儀致すを、八重垣氏に助けられたる其御禮に參つたと取次いで下され。
三平　畏りました。左様なら先づこちらへ御通りなされまし。
逸之進　然らば許さつしやれ。
（ト右合方逸之進お雪お常付きよき所へ通る。宗助下手へすまふ。三平煙草盆を出し、）
三平　只今御取次致します。然らばおまちなされまし。
（ト三平奥へはひる。皆々捨臺詞、矢張合方にて、奥より八重垣紋三着流し大小を持ち、三平茶臺に茶碗をのせて、銘々へ出す。紋三皆々を見て、）
紋三　家來に様子承りましてござるが、稲毛公の御藩中の御方とのよし。見苦しき宅へようこそ御出來にござります。
逸之進　左様なら其許様が八重垣紋三殿でござるか。拙者儀は妻木逸之進と申すもの始めて御意得申すでござる。
紋三　某事は八重垣紋三と申す。曩に大江家へ召出されましたる未熟者、御見しり置かれ下されませう。
逸之進　以後は入魂（じゆこん）に賴み存る。扨、一昨日鶴ケ岡にて娘雪女が難儀の場所へ御出で下され、娘が災難を

御救ひ下されしよし、宅へ歸り委細の吹聽。娘が爲に命の親の八重垣氏、ア、忝う存る。コリヤ〳〵娘、どう致した物だ。身共にばかり禮をいはせ、紋三殿の顏を見て居らずと、ちやつと御禮申さぬか。コリヤ常。そちも御禮を申せ。エエ宗助。氣の附かぬ。其方も御禮を云はぬか。ハテ扨世話のやける事ぢや、ア、口がすくなる。コレお家來衆。どうぞ茶をモウ一ツ下され。

三平　かしこまりました。（ト三平茶をくんで出る。）

お雪　父樣が其樣に仰しやらずと、御禮申さいでなりませうか。私が恥かしめを受けます難儀をお助け下されまして、何と御禮を申さうやら、有難う存じます。

お常　お雪樣が仰しやります通り、一昨日の御恩の程、中々口先で御禮は申し盡されませぬ。

宗助　危うい所へあなたがおいで下されまして、惡者めらを投げたり擲つたり、ひどい目に合せて下されまして、お孃樣の爲には命の親のあなたさま。

三人　エ、有難う存じます。

紋三　是は〳〵、逸之進殿を始め、御息女御家來迄其樣に仰せられては、拙者甚だ迷惑仕る。御手をお上げ下され〳〵。

逸之進　聞きしに増る紋三殿の人品骨柄、其上御手練の樣子承り、誠に感心致してござる。コリヤ宗助。其品を是へ出しやれ。

宗助　ハイ〳〵、申し御家來衆。どうぞ廣蓋をお貸し下されい。

三平　畏りました。

（ト三平廣蓋を出す。宗助風呂敷より反物の進物を出し、廣蓋へのせ、逸之進の前へ出す。）

逸之進　紋三殿。何か生魚と存じたれど、折惡しく有合はさず、此品は餘り些少にはござれ共、ほんの御禮の印、御受納下さればば有難う存ずる。（ト紋三の前へ出す。）

紋三　是は又、恐入りましたお詞。畢意通り掛かりにて、御息女の御難儀見るに忍ばず、狼藉者を支へましたばかり。かやうにお禮を受けましては、甚だ痛み入ります。受けましたも同前にござりますれば、此儘お納め下され。

逸之進　イヤ〳〵、さ樣仰せられた迚、拙者さ樣かと持つて立たれもされぬ。ほんの拙者が心ばかり。平にお請け下され。

お常　只今主人が申します通り、誠にお粗末にはござりますれど、折角の志、どうぞお受け遊ばして下さりませうならば、

宗助　わたくし共迄、へイ〳〵、

兩人　有難うぞんじます。

紋三　それ程迄に仰せられる事、強つてと申すも却つて失禮、然らば受納致すでござりませう。千萬忝う存じます。（ト廣蓋を片寄せる。）

逸之進　然らばお受け下さるか。忝い〳〵。扨、紋三殿。か樣にお禮を申した上、チトそこ許にお賴み申上ぐる儀が、ござるが何と聞届けては下さるまいか。

紋三　是は改つたるお言葉、何事かは存ぜね共、拙者が身に叶ひました事ならば。

逸之進　聞届け下さるか。

紋三　シテその御賴みと申すは。

（ト替つた合方、逸之進思入れ。）

逸之進　賴みと申すは外でもござらぬ。コリヤ娘。是へ來やれ。

お雪　ハイ。（ト恥かしさうに傍へ來る。）

逸之進　紋三殿。賴みと申すは是なる娘が事でござる。

紋三　何。御息女の事と仰せらるゝは。

逸之進　サア、恥を申さねば相分らぬ。一ト通り御聞き下され。手前事は稻毛殿より五百石頂戴致し相勤め居りまするが、此雪女が上に兄も姉もござつたなれ共、幼少にて相果てそれより年たちまして、是なる娘が出生致し、下世話に申すお藥湯子とやら。年寄りましての血の餘り、此雪女が可愛うて〳〵相成りませぬ。承ればそこ許には未だ御獨り身との事、差附けがましき事乍ら、氣儘育ちの不束者、定めし御氣には叶ふまいが、娘雪女を貴殿の妻女に遣し度うござるが、どうぞ末々迄不便をかけて下さらば、老の喜び、賴みと申すは此通り、何と聞届けては下さるまいか。

（ト思入れにて言ふ。お雪恥かしき思入れ。お常宗助も傍らから賴む思入れ。紋三迷惑なる思入れ。）

紋三　逸之進殿の御賴みの仔細、身

不肖なる某をさ程に思召し下さる段、いかばかり忝う存じますれど、餘の事ならばともかくも此儀ばかりは。

逸之進　スリヤ不束な娘ゆゑ、妻女に持つては下さらぬか。

紋三　中々以て、さ樣な儀ではござらぬが、御息女を婦妻に申受けられぬと申すには、據所無き仔細がござる。

逸之進　シテ餘儀ない仔細と仰せらるるは。

紋三　承引ならざる事の次第、御親子共にお聞き下され。

（ト替つた合方。）

一昨日鶴ケ岡にて御息女の難儀を救ひし所、鎌倉昵近の侍共、某へ狼藉なすゆゑ是非に及ばず、其場にて四人の侍を仕止めし折から、大江因幡之介殿は八幡宮へ社參にて、御供に附添ふ普代の家老蔭山武太夫殿の御目に留り、直樣某を大江家へ推擧下され、三百石に取立てられ、其上殿の御差圖にて蔭山氏の一人の娘を拙者の婦妻に致せよとの上意を蒙り、即ち今日吉と有つて、只今婚姻致す所、夫ゆゑ其許の御息女を申受けざる仔細と申すは、斯くの通りでござります。

（ト思入あつて言ふ。逸之進皆々之を聞き本意なく思入れ。逸之進ホツト溜息つき、）

逸之進　スリヤ何と申さるゝ。當家の家老蔭山氏の娘御を、

お雪　殿さまよりの御媒にて、

お常　もはや今日此處で、

宗助　アノ紋三樣と、

逸之進　祝言を、

四人　なさるとな。

紋三　甚だ以て各々方には氣の毒千萬な儀でござります。

（ト逸之進投首して思入れ。）

逸之進　娘、聞いたか。紋三殿は主人の上意にて、當家へ推擧の蔭山氏の息女と緣組のきまりし上は、是非もなしと思ひ、諦い。

（トお雪泣く。逸之進目をしばたゝき、）

返答せぬは諦められぬか。ヲ、尤おやおや。それより此親が殘念なはいか斗り。そちが不慮の災難が想ひとなり、器量發明武術の達人の紋三殿、よい聟を取りましたと自慢せうと思ひの外、誰しも皆ら ぬ親心、武太夫殿の娘御と緣組有

りしは天晴手柄、親でさへ羨ましいもの。そちが心を思ひやる。無い縁と諦めて、ふつつりと思ひ切れ。よよ。

（ト思入れにて。お雪思入あって）

お雪　不束なる私ゆゑ御氣に入るまいと思ひ乍ら、父様の御情で添はせてやらうとの御詞に、押附け業の嫁入を樂しみに來た甲斐も無く、蔭山様の御娘ご様と御祝言なさるゝと聞いて、どうして思切られませう。内へ戻つて此儘にこがれ死にをするわいなア。（トはつと泣く。）

お常　御尤でございます。御道理でございます。御心立なら御器量なら、優しい紋三様。御獨り身ぢやと聞いたゆゑ、旦那様へお勸め申し、お雪様の聟君と思ひの外、餘儀なき譯で御縁組が叶はぬとは、あなたの御心の内がおいたわしう存じます。

宗助　さうぢや／＼。此親爺めでさへがつかりと力が拔け、くやしくつて／＼なりませぬ。大事のお孃様の先を越しをつた蔭山の助平娘。此齒が達者で有つたならば喰附いてやりていなア／＼。

お雪　二人乍ら、もう何にもいつてくやんな。聞けば聞く程此胸がさけるやうぢやわいなう。

（トはつと泣く。お常脊中をさする。）

逸之進　是はしたり、娘を始めそち達迄、めろ／＼と何事ぢや。此方はともあれ、當家は目出たい祝儀の場處に泪は不吉ぢやぞ。サア／＼目出度う笑うて立ちやれ／＼。

お雪　そんならモウ戻らねばならぬかいなア。

逸之進　ハテ、しれた事。長居した迚せんない事ぢや。サア立て／＼。

お雪　夫ぢやというてお名殘り惜しうて。

（トハアと泣く。紋三氣の毒なる思入れ、逸之進見て、）

逸之進　ヲ、尤ぢや／＼。（ト立たうとして、）何の名殘り惜しい事があるものか。紋三殿斗りが男ではない、鎌倉中によい男はいくらもある。サア泣かずと立ちやれ／＼。

お常　お雪様。旦那さまがあの様に御氣をもんでお出でなされますれば、なア宗助どの。

宗助　それ／＼。此處の内へ面當に

立派な聟様を親爺めが探して上げます。サアちやつとお歸りなされ〳〵。
逸之進　コレ宗助。いかなる事と歸ると申すは祝言の忌詞（いみ）ぢや。
お常　旦那さまとなされた事が。よそ外の祝言に何のかまふ事がござりませう。
宗助　さうぢや〳〵。あばれ散らして歸るぞ〳〵。（ト宗助足音させて門口へ出る。）
三平　是はどなたも御苦勞でござりました。
（ト三平はき物を直さうとするを、宗助ひつたくり。）
宗助　何のおのれらの世話になるものかへ。
三平　是は又きつい腹の立てやうだ。
（ト此内お常、捨臺詞にて無理にお雪の手を取り外へ出る。逸之進思入れ。）
逸之進　イヤ何、紋三殿。取込の中へ參り、此方の勝手斗り、必ず御氣にさへて下さるな。然らば身共はのだつてござらう。
（ト逸之進門口へ出る。紋三思入れ。）
紋三　是は〳〵、何の御風情もなく、今しばらく共申されぬ今日の仕儀。
逸之進　浮世の中は有爲轉變、悦びあれば悲しみあり。
お雪　思ひ廻せば御羨ましい、
お常　あた、御目出度い、
宗助　今夜の祝言。
お雪　夢見たやうな本意ないお別れ。
逸之進　アコレ、目出度く悦びして、（ト紋三と顔見合せ思入れ。）開き申さう。
（ト唄、時の鐘。お雪心を殘すを逸之進せり立て、兩人附いてしほ〳〵向うへはひる。紋三後見送り、思入れ有つて。）
紋三　身不肖なる此紋三を執心下さる老人の親切、またお雪殿の志、蔭山親子（しんし）の悦びに引かへ、妻木殿親子の心の內、察しやる程。
（トほろりと思入れ、六ツの時計鳴る。）
三平　あれは六ツの御時計。御祝儀御支度なされませぬか。
紋三　さやう致さう。思へば不便な。
三平　エ。
（ト紋三向うへ思入れ有りて、氣をかへて。）
紋三　サ參らう。
（ト兩人思入れ。唄、時の鐘になり、道具

廻る。)

本舞臺三間、本舞臺。向う床の間、風雅なる銀襖上下折廻し、同じく襖、奥座敷の體。眞中に島臺のし昆布三組(みつ)の盃に銚子並べ、燭臺を照らし、お柳丸綿を冠り、武太夫繁之丞お源おさんおたけ順齋、並よく居並び、琴唄の合方、道具留る。

順齋　扨、今晩は日柄もよく御祝言。殊に御家中に並ぶ者なき花婿の紋三殿。モシお柳殿。嘸御嬉しうござらうなア。嬉しさうなお顔でござる。

お柳　順齋様のなぶつて斗り、覺えておいで遊ばせえ。

順齋　又程なく繁之丞殿もよい御縁女を御呼びなさるがよい。

繁之丞　順齋様。私は女子は嫌ひでございます。

武太夫　悴もかやうに成長致しながら、いつ迄も子供の樣な事ばかり申して困ります。

順齋　イヤ、御年の參らぬ内は皆さやうでござるが、今に女が好物におなりなさらう。ハヽヽヽ。

お源　御支度が宜しうございますれば、紋三様を御連れ申さう。

(ト立たうとする。奥にて、)

主水　只今夫へ御同道申すでござらう。

(ト右合方、奥より紋三麻裃に着替へ、主水と出で、よき所へすまひ。)

武太夫　塚本氏御夫婦には何かと御心配忝う存ずる。

主水　殿の御名代として媒の役目、今日最上吉日とあつて今日の祝言。

お源　幾久しく御祝儀、

皆々　申上げまする。

主水　イザ、お盃。

(ト主水お源、盃をお柳の前へ直す。お柳盃を取る。女形銚子の口を合はせ、酌をして又紋三へ盃をさす。)

順齋　相に相老の松こそ目出たかりける。

(ト謡をうたふ。宜しく盃事有りて。)

武太夫　目出たい〳〵。繁之丞祝うて一トさし。

繁之丞　畏りました。(ト繁之丞謡をうたひ乍ら、扇を開き舞ふ事。扇の親骨放れる。繁之丞見て、)祝儀の舞に扇の親骨。

(ト心にかゝる思入れ。)

武太夫　悴。何とか致したか。

繁之丞　イヤ目出度く祝してござりま

す。（ト扇を隠して腰へさす。）

主水　此上は服を改め、色直し。

お源　サア〳〵、聟君嫁御、早う。

紋三　さやうござらば舅殿。

武大夫　聟殿。

紋三　後刻、御目に懸りませう。

（ト唄になり、お源お柳の手を取り、紋三主水娘二人附き、奥へはひる。）

順齋　扨、滞りなく御祝言相濟み、嘸御滿足でござらう。

武太夫　順齋老にも打寛ろぎ、一献お過し下され。

順齋　何か斯う、お二人の祝言を見て、味な心持になりました。

繁之丞　順齋様の戯言口。さやうな儀は御無用になされまし。

武太夫　こりや悴。勝手へ申付け、燗の用意致しやれ。

繁之丞　畏りました。

（ト合方にて、繁之丞奥へはひる。）

武太夫　今宵は順齋老の例の踊りが拜見致したい。

順齋　お好みとあれば、御覽に入れよう。踊は何かや〳〵、ヤアトナア。

（ト踊り地になり、順齋無性に踊る。武太夫笑ふ。右鳴物にて道具廻る。）

本舞臺三間平舞臺。正面芥壁、三尺の床違ひ棚、上下折廻し、障子出入り。眞中に屏風を立て、床を取り枕二つ並べ、朱塗の行燈を灯し、すべて寢間の體、右鳴物にて道具留る。

（トなまめいたる合方にて、お柳模樣の振袖抱帶、おげん手を引き、紋三着流し、主水袴の形、娘二人銚子盃持ち出て、お柳紋三を床の上にすまはせこ）

主水　色直しの床盃。サア〳〵早う。

お源　イザ、お二人様。

（ト家中娘、酌をして盃事有てこ）

お柳さん。嘸御嬉しうございませう。

お柳　ハイ。（ト顏を隠す。）

おさん　お柳さんのお嬉しさうな、アノ顏付。

おたけ　傍で見るさへ羨う存じます。

主水　ヤ、紋三殿。お柳殿は初ものなれば隨分大事に。

紋三　主水殿の重い口から戯言ばかり。

お源　戯言所か、夫が肝腎。ナアお柳さん。

お柳　アレ、又やつぱり。（ト恥かしき思入れ。）

主水　仲人は宵の程。

お源　ゆるりとおしげり、

女三人　なされませいなア。

（ト唄になり、娘二人お柳をなぶる。主水決婦行かうとしてお源帯の間より鼻紙を出し、床の上へなげる。お柳は恥かしき思入れ。紋三主水顔見合せ笑ひ、四人奥に入る。後なまめきたる合方へ両人思入れ。）

紋三　コレ、お柳殿、祝言するからは何も恥かしい事はない。もそつとこつらへ寄らつしやれ。

お柳　不束な私、御見捨てなきよう願ひます。

紋三　どうして見捨てゝよいものか。行末かけて變らぬ女夫。

お柳　スリヤ御眞實でござりますか。

紋三　何僞りを申しませう。（ト手をとり引寄せる。）

お柳　エヽ、お嬉しう存じます。

（ト両人抱付き、しんみりとした合方にて、下手障子をあけ、以前のお雪そろ〳〵出て、行燈の上より屏風の内を恨めしさうに覗く。両人少々ぞつとしたる思入れ、邊りを見て、お柳お雪を見て、）

アレエ、

（ト紋三にすがる。紋三驚きお雪をすかしみて、）

紋三　ヤ、そなたは最前の妻木殿の娘御。どうして此處へ。

お雪　わたくしはどうも内へ戻られませぬ。

（トしほれてよき所へすまふ。）

紋三　そりや何ゆゑ、

お雪　何ゆゑとは、お情ない。あなたを思ひ切る事はなりませぬ。お嫌ではござりませうが、下女端た共思召し、お傍に置いて下さりませ。

（トお柳、是を聞き腹の立つ思入れにて、紋三を見てそつとつめる。）

紋三　アイタヽヽヽ。

お柳　あなた、アノ娘御さんに會ひたいと仰しやりますか。

紋三　どうしてそんな。コレお雪殿、傍に居度くば置いても進ぜうが夫ではどうも。

お柳　イエ〳〵、あなたが置かうと仰しやつても、私が、ハイなりませぬわいなア。（ト悋氣の思入れ。）

お雪　すりや、お恨でござります。女子は誰しも同じ思ひ、せめて朝夕お傍に居て、お床の上げ下ろしや、御膳の御給仕位は。

お柳　イエ〳〵、なりませぬ〳〵。紋三様の御傍へ片時も置く事はなりませぬ。これ、何方ぞ此娘御さんを早う連れて往て下さんせいな

ア。

（ト之を聞き上手より順齋出て、）

順齋　お柳殿。何を申されるのぢや。

お柳　イヽエなア、其娘御を早う連れて往て下さりませ。

順齋　何、娘とは。（と順齋お雪を見て、）こなたは、最前一寸様子を聞いた妻木殿の娘御、あれ程思切つて歸り乍ら、未練らしい。サア〳〵愚老と一緒に奥へござれ〳〵。

お雪　イエ〳〵、わたしや紋三様に。

順齋　ハテ紋三殿の替りに愚老ではどうでござる。男振りに替りはあれど、下のものの替りはない。おひもじくばお振舞申さう。

お雪　何、お前様に。わたしや嫌ぢやわいな。

（ト右の合方にて、順齋無理にお雪を引張り、上手へはひる。お柳跡見送り、）

お柳　申し紋三様。アノ娘御に、あなたお心がござりますか。

紋三　コレハ如何な事。そなたを退けて外の女子に。

お柳　イエ〳〵、そりや嘘でござります。あなたのお目附きで知れますわいなア。

紋三　何を言やる。殿様の御媒で女房に持つた美しいそなた、わしが身には過物。あの様な娘に見替へてよいものかいなう。

お柳　あの又、人を嬉しがらせる事斗り、エヽ、憎らしい。

紋三　可愛らしい。

お柳　そりや誰がへ。

紋三　そなたが。

お柳　ほんまの事なら、嬉しうぞんじます。

（ト兩人じつと寄そふ。屏風の蔭よりお雪出て之を聞き、）

お雪　エヽ、お羨しい。ハア、。

（ト泣伏す。兩人見て恟り、）

お柳　コレ又娘御さんが。

（ト腹の立つ思入れ、上手より順齋出て、）

順齋　ハテ、今の娘は何處へ往つたか。（トお雪を見て、）ヲヽ、此處にござつたか。扨も聞分けの悪い。サこつちへござれ〳〵。（トお雪の手を取り、恟りして、）エヽ、冷たい手だ。サア〳〵、

（ト嫌がるお雪を順齋無理に連れて、上手へ入る。始終合方、下手より若徒出て、）

三平　最前の逸之進様が御直談なされ度いと、又お出でてござります。

紋三　何、逸之進樣が御出でとは。
（ト若徒下手を見て、）
三平　是へ御出でなされますする。
（ト言捨て、若徒横手へはひる。下手障子を明け、）
逸之進　紋三殿、御目に掛り度い。許さつしやれ〳〵。
（ト言ひ乍ら出る。後より下女お常にて水引したる鰹節を臺に乗せ持ちて出る。紋三床より下りて、）
紋三　是は逸之進殿。何用有つて、また此席まで。
逸之進　押して是へ參りしは、改めて祝言の悦びを申しに參つた。
お常　明朝の事になされませとお留め申しましても年寄の一轍、折角お靜まりなされた所へ、御氣の毒でござります。
（ト逸之進、鰹節の臺を前へ出し、）
逸之進　紋三殿。是は餘り些少にござれど、今宵祝儀に態と進上致す。どうぞ御受け下され。
紋三　是は重ね〳〵の下されもの、眞に痛み入りまして面目なう存じまする。
（ト此内、お柳床より出て、）
お柳　申し、そこな逸之進さまとやら、折角今宵祝言して人が寝ようと思ふ所へ、あたどんな祝ひもの、早う持つてお歸りなさんせいなア。
（ト臺をつきもどす。紋三氣の毒なる思入れ。）
紋三　是はしたり、折角の下され物、コレそなたも御禮申したがよい。
（ト臺を引寄せる。）
お柳　イエ〳〵御禮所かいナ。こんな物はいりませぬ。（ト又臺を突戻す。）
紋三　コリヤ〳〵、どうしたものぢや、チトたしなんだがよい。（ト臺を引寄せる。）
お柳　イエ〳〵たしなみますまいわいナ。
（ト突戻す。是にて白臺打返し、中より白木の位牌出る。紋三見て、）
紋三　ヤ、。逸之進どのが婚姻を祝されし、白臺中より出し此位牌。
逸之進　即ち娘雪でござる。
紋三　何と仰しやる。
逸之進　最前屋敷へ歸ると其まゝ、娘雪めは井の内へ入水いたしてござる。
紋三 お柳　エ、、、、。
（ト恂り。逸之進鼻紙を顔に當てハツト泣く。）

紋三　スリヤお雪どのには入水いたされしとか。ヤ、、、。

お常　おいとしい事でござります。

（トハツト泣く。上手障子の内より、）

順齋　ヤア幽靈だ〳〵。

（ト前へ出る。皆々恟り思入れ。）

今の娘御を愚老が一ト針參らうと冷(つめ)たい手を握る内、この樣子を聞いて煙の樣に消えました。

お柳　アレエ。（ト紋三にすがる。）

逸之進　スリヤ娘。

お常　お雪さまが。

紋三　扨は一念幻(まぼろし)に迷ひ來りしものなるか。ハテ不便な事を。

（ト思入れ。逸之進泪を拭ひ、）

逸之進　叶はぬ戀を思ひ詰め、可愛(かわい)や蕾(つぼみ)の娘一人、あたら命を捨てさせました。

（トまたハツト泣き、思入れあつて合方。）

年寄の愚痴がましく申すではござらぬが、子に迷ふ親ごゝろ、夫婦の中には子無きを愁ひ、神に祈り佛に賴み、もうけ度く、やう〳〵產せた一人の娘、母は產後にむなしうなり、乳母の乳房でやう〳〵と、男の手で育て上げ、成人するに隨ひ、年寄子は不便が一倍、我儘育ちの氣情者と、他人はそしり笑ふとも、親の目には見えぬが因果、よい聟とつて初孫の顏を見ようと、朝夕に樂しんだ甲斐もなく、せめて病死でもする事か、入水して死するとは、前世の惡業が報いきて、親子と生れ、浮目を見せるかコレ娘、不便な最後を遂げたなア。

（ト位牌抱きしめ、大泣になく。お柳紋三じゆつなき思入れ。お常逸之進の背中をさすり、）

お常　其お嘆きは御道理ではござりますが、泪がお雪さまの御追善にはなりますまい。お二人さま。嘸未練な人とお笑ひもござりませうが、杖柱とも思召すお一人のお雪さま、嘸お別れなされ、後先の分(わけ)前(まへ)なく、自分の仰しやる事ばかり。どうぞ御免下さりませ。

紋三　某故に逸之進殿、御息女を先立てられ、嘸や便り無く思召されんが、定り事と諦めて、追善供養が未來の爲。

お常　其御詞に甘へましての一つのお願ひ、どうぞあなたの御手にふれました品を頂戴いたし、お雪さ

まの御死骸の手に持たせたく存じ
ます。
(ト是にてお梅思入れ。)

お梅　聞けば聞くほどおいとしいお心ね。はしたない悋氣したのが恥かしい。假の此世は私が殿御。紋三さま、未來はどうぞお雪さまに添うてあげて下さりませ。

紋三　言ふにや及ぶ。未來永く紋三が妻のお雪どの。

お梅　其お詞が追善供養、わしが酌でお雪さまの御位牌と盃なされて下さりませ。

紋三　如何にも此場で盃を。

お常　ヤレ。旦那さま。紋三様がお雪さまの御位牌と御盃をなされます。

逸之進　スリヤ娘が位牌と祝言して下さるか。エ、忝ひ。

お梅　幸ひ爰に銚子盃。サア／＼早う。

(トお梅、以前の銚子盃出す。逸之進位牌を白臺へ載せて。)

逸之進　サア／＼娘、祝言じや／＼。

(ト盃を位牌の前へ直し、お梅酌をして紋三へさす。盃を紋三取り、お常酌をする。)

順齋　イヤ又今夜の様に祝言の度々ある事もねえ。今度は四海波でもあるまい。三途川浪靜かにて弘誓(ぐぜい)の舟へ帆をあげる。(ト謠の様に唄ふ。)

お梅　百歳の御壽命過ぎ蓮の臺(うてな)で女夫の結び。

お常　思へば悲しい。イエ御目出たう存じます。

逸之進　是で娘が未來の迷ひ晴れて成佛致すでござらう。

お常　此盃を申し受け、御棺へ入れて納めまするでござりませう。

(ト常、盃をとり、鼻紙一巴へ包み懷中する。お梅位牌を片付ける。)

由(よし)ない事にてお二人さまにも無氣鬱。サ夜更けぬうちに旦那様。

順齋　愚老も御一所開きませう。酒の醉は覺めてしまふ。何だかぞく／＼と、まだ幽靈が取付いてゐるかしらぬ。

(ト身震ひをする。下手より若黨出て、)

三平　順齋様、わたしが道迄送つて上げませう。

順齋　夫は／＼忝い。サアお開き／＼。

(ト逸之進ひよろ／＼とお常のかたへ取付き立つ。)

紋三　さ様なれば逸之進様。

お柳　隨分道を氣を付けて。
お常　畏まりました。今宵は目出度い御祝言。
逸之進　翌日(あす)は無常の野邊送り、
紋三　此世の名殘惜しまれて、
お柳　未來の便を松風の、
逸之進　苦は色かゆる、
紋三 お柳　エ。（ト顏見合せ、思入れ。）
逸之進　世の中ぢやなア。
（ト唄になり、逸之進とぼ〳〵と、お常の肩に取付き、順齋若徒付いて下手へはひる。お柳紋三後見送り、）
お柳　思ひまはせばわたし故お雪さまの非業の御最後。
紋三　是も定まる前世からの約束事。
お柳　おいとしい事でござりますわいな。

（ト合方にて奥より武太夫出て來り、）
武太夫　聟殿、娘もまだ寢やらぬか。
紋三　舅殿、先刻より御構ひ申さず嘸かし御退屈。
武太夫　紋三殿。チト其許に折入つて頼み入れたき仔細がござる。コリヤ娘、紋三殿と新枕の邪魔致す不粹な親と思はうが、暫時の間、其方は奧へ參れ。
お柳　どの樣な御用か存じませぬが、翌日(あす)の事になされても。
武太夫　ハテ扨、急な事じや。奧へ參れ〳〵。
お柳　そんならどうでも。
武太夫　ハテ參れと申すに。
お柳　つつとモウ只今參りますわいなア。
（ト合方になり、お柳思入れあつて奧へはひる。武太夫あと見送り、）
武太夫　イヤ何、聟殿。改め申すには及ばねども、先達て鶴ケ岡にて狼藉者を殺害なし、其折から、某其場へ通り懸り、お手前の難儀をお救ひ申せし事、よもやお忘れは召さるまいなア。
紋三　如何にも其節の御高恩、まつた其上當家へ御推擧下され、若殿の御意に叶ひ、御高祿を賜はり、其上に御佩せまで頂戴致し候段、重々の御高恩、心魂に徹し忘れがたく、すは事ある時には君へ一命捧げる所存も、ひとへに貴殿の御厚情なれば、誠の親とも心得ますれば何御用の御頼みにても必ず意變は仕りませぬ。
武太夫　然らば申し聞さうが。誓言が

見たい。

紋三　エ。

武太夫　サ、誠の親とも思はば、善悪ともに背かぬといふ金打おしやれ。

紋三　何かは様子存せねども、親にも等しき貴殿の仰せ拙者が心底。

（ト刀を抜き、小柄にて金打する。武太夫思入れ有つて、）

武太夫　天晴々々。然らば申すが御身當家へ仕官召されしは何か心に望みがござらう。

紋三　拙者望みはかく高祿を頂戴致せば、若殿へ忠義を盡し立身致さんわが所存。

武太夫　イヤ其一言吞込まぬ。立身出世斗りじやあるまい。若年なれ共一ト器量ある身の形相、若殿へ取入つて家國押領なし、八重垣の家名を立てん下心と、此武太夫が眼力、よもや違ひはあるまいがナ。

紋三　スリヤアノ某が。

武太夫　思ひ内にあれば色外に顯はるとやら、かねて此武太夫大望の儀一ト通り申し聞かさん。

（ト謀への相方になり。）

某兼て當主因幡之介を無き者となし、大江の家を押領なさん我大望、家中の諸武士も大半味方につくと雖も、まさかの時片腕となるべき者一人もなし。汝が手練大丈夫なる魂を見極めし故、大江殿へ推擧なせしは、味方に招かん我計略。折よく殿の差圖にて、娘の聟となりたる其方、親子緣を結びし上、味方に付けなば龍に翼を得たる心地、大望成就の時疑ひなし。さりながら、こゝに一つの難儀あり。俄に明後日國家老到着の由、さあらばわが望叶はず。其方明日途中に待受け、飛道具を以つて國家老を打つて捨てれば愁ひなし。事急に及びたれば捨て置かれず。聞届けて味方に付きやれ。得心なければ我大望も最早是迄。我を打つて其方が手柄となし。行末頼む娘が身の上、但し速かに承引なし、味方に付くか。我を打か。二ツに一ツの生死の境。八重垣紋三返答はナ、何と。

（ト武太夫思入れにて急度言ふ。紋三、是を聞き、いろ／＼悔り、當惑の思入れ有つて、）

紋三　スリヤ舅殿には家國を押領なさん思召しなるか。

武太夫　それ故あかす我大望。聞かれし上は味方に付くか。
紋三　ぢやと申して。
武太夫　金打致したは僞りか。
紋三　サアそれは。
武太夫　舅を打捨て手柄にするか。
紋三　サアそれは。
武太夫　味方に付くか。
紋三　サア。
武太夫　サア。
紋三　サア／＼／＼。
武太夫　聟どの返答はナ、なんと。
紋三　ハア。
（ト當惑の思入れ。是非に及ばぬといふ思入れにて、）
武士の誓ひの金打なし、親に見歸る謂れなし。八重垣紋三、如何にも味方仕るでござります。
（ト是非なき思入れ。武太夫聞いて、）
武太夫　ホウ早速の承引、滿足／＼。得心の上は此場にて一味連判へ血判おしやれ。
（ト武太夫邊りを見て懐中より連判を出し開き、矢立を出し名前を書き紋三の前へ出す。）
紋三　畏つてござります。
（ト紋三小柄を出し、指を切り血判する。武太夫見て巻納め、）
武太夫　是にて身ども安堵いたした。今宵は夜も更けたれば何かの密事は明朝宅にて申合さん。
（ト武太夫連判を懐中して立つ。）
紋三　スリヤ舅殿には最早御歸宅でござりますか。
武太夫　今宵は枕も高砂に。
紋三　大望成就の其上は。
武太夫　聟と舅の運開き。
紋三　まづそれ迄は何事も。
武太夫　云はぬが花聟。
紋三　舅御様。
武太夫　ドリヤ参らう。
（ト唄、時の鐘にて武太夫いそ／＼思入れ有つて下手障子へはひる。紋三後見送り、しつと思入れ。替つた相方。）
紋三　思ひかけ無き武太夫の悪事に、恩人といひ義理ある親。是非なく味方に付いたれども、目前主君の御身の大事と有つて、承引なさゞれば舅の悪事を訴人も同前、ハテ何としたもので有らうナ。（ト思入れ有つて、）武太夫殿の歸り道、大手の馬場へ驅行き、とつくりと異見の加へ、若し聞入れなき時は絶對絶命、是より直ぐにそれ。
（ト早き合方になり、紋三手早く袴をはく。時の鐘、右道具廻る。）

本舞臺三間、向う黑幕に高き草土手、上下植込のもの、所々振能き丸ものゝ白梅、柳の立木、日覆より同じく二段につり枝、總て馬場の體、時の鐘にて道具留る。

（ト時の鐘合方にて、向うより若衆の中間宿提灯を持ち、以前の武太夫出て舞臺へ來り。）

武太夫　存の外深更に及んで其方も嘸待遠で有つたらう。サ參らう。

（ト向うバタ〳〵にて紋三走り出て、舞臺へ來り、武太夫を見て、）

紋三　舅殿、まだ是にござりましたか。エヽ嬉しや〳〵。

武太夫　誰かと思へば聟殿。あわたゞしき樣子、如何致した。

紋三　サ其仔細と申すは、舅殿、家來を遠ざけ下されい。

武太夫　コリヤ八助。其方先へ參り、只今歸宅致すと申せ。

中間　かしこまりました。

（ト若衆、提灯を置き、土手へはひる。）

武太夫　聟殿、家來をよけしは最前の密事なるか。

紋三　如何にも舅殿の何卒思ひ止つて下されまして。

（ト紋三雨手をついて急度言ふ。誂への合方、武太夫捨石へ腰をかけ、）

武太夫　ム、後先申さず止れとは、扨は我大望を。

（ト思入れ、紋三摺寄り乍ら、）

紋三　サ、昔が今に至る迄、叛逆謀叛の榮えたる例し無き事御存じあらん。大江家數代の家老職、何不足なき身を持ち乍ら主君の打つて家國を押領なさん邪非道、天道なくばいさ知らず。何とて成就なすべきぞ。叛逆露見なす時は、親子諸共、木の空へ懸る浮目に逢はうより、御身を大事に主君へ忠義、誠の道に叶ひなば、蔭山の家名恙なし、繁之丞殿にもお柳どの、繼がる緣の紋三めを、不便と思召さるゝならば、何卒御改められ、本心になりて下さりませ。モシ舅御樣、遍へに願ひ上げまする。

（ト思入れにて言ふ。武太夫思入れ。）

武太夫　ヤア表裏の二タ股武士、金打の上大事を明させ、味方に付いて血判なし、今に及びて變心なすは命惜しさの心替り、見さげ果てたる腰抜け侍、娘をくれたが殘念ナ。エ、おのれどうしてくれう。　ト紋三を引付け、扇にて打すへ舞臺へ捻じ付けて、言はうやう無き犬侍、憶病未練

の不所存と知らず、一大事を明したは、思へば／＼口惜しい。（ト紋三を突放し、無念の思入れ。）

紋三　其御怒り(いか)は尤も至極、卑怯未練の心にあらず、紋三命はさら／＼惜しみ申さぬ、切るとも突くとも心の儘、あなたの御自由に成つた上、思ひの儘になるさ。

武太夫　ヤア一旦思立つたる大望、今更變心なすべきぞ。幸先(さいさき)くじく不吉の異見、大望露見も覺束なし。生けては置かれぬ觀念なせ。

（ト武太夫手早く拔打に切付ける。紋三立廻つてきつと押へ、）

紋三　左樣に魂据はりし上は、主君の大事にや代へられぬ。是非に及ばぬ御手向ひ。

武太夫　こま事ぬかさず、覺悟ひろげ。

（ト早めたる合方、紋三拔合せ立廻つて、武太夫土手の上にて、紋三梅の木を小楯に取り兩人急度見得。是より鳴物になり、草土手梅柳の立木を楯に、兩人宜しく立廻つて、其內武太夫連判を落す。紋三取つて、トヾ武太夫捨石に爪突くを、紋三肩先を切り、武太夫苦しき思入れ。）

ヤア不覺を取りしか口惜しい。

（ト紋三疊みかけて武太夫を切倒し、留めを刺す。時の鐘、紋三ホット思入れ。）

紋三　許して下され舅殿、主家の大事に替へ難き故、親を打ちたる上からは此場を去らず、切腹なし、死出三途を伴はん。それ。

（ト紋三肌を潤げ、腹を切らうとして思入れあり。以前の連判を出し。）

イヤ／＼今此場にて切腹なしては、此連判にて舅殿、惡事の露見は目前。死ぬる命を止りて連判狀を所持いたし、當所を立退き折を見合ひ、繁之丞に手渡しなし、敵と名乘り潔く討るゝが武士の道、さうぢや／＼。

（ト身繕ひ、連判狀を懷中にして立上る。向うにて人音する故、紋三拔身を取り、上手へはひる。時の鐘、合方にて向うより若黨箱提灯を持ち、繁之丞出て來り、）

繁之丞　心ならざる胸騷ぎ、紋三樣の御出でなされぬが心懸り。

三平　蔭山樣の御宅へ御出で下されましたら、御樣子が知れませう。

（ト兩人舞臺へ來り、繁之丞思はず武太夫の死骸に躓き、思入れ。）

繁之丞　コレ三平明し／＼。

（ト三平提灯を出す。繁之丞よく／＼見て、）

ヤ、コリヤ親人樣が數ケ所の手疵。

三平　旦那樣いなう。

（ト兩人呼び、繁之丞よく見て、）

繁之丞　此通り留まで刺した上は呼生けたとて何返答があらう。

三平　御尤でござります。何者の仕業か、下郎めさへ口惜しうござります。

繁之丞　最前祝儀の舞の時、扇の骨の放れしは、此御最後の知らせであつたか。

（ト言乍ら傍に落ちたる小柄を取り、提灯に透し見て、）

小柄の模様は八重垣に撫子の高彫、最前紋三殿が所持せし小柄、死骸の傍に落散つたるは。ハテナア。

（ト合點のゆかぬ思入れ。ハタ／＼にて上手より侍麻裃、若衆の中間供にて提灯箱を持たせ、出て、繁之丞を見て、）

侍　繁之丞様。是にお出でなされましたか。只今御寶藏へ盗賊の忍入り、貴殿お預りのみどり丸の短刀紛失致してござります。

繁之丞　スリヤ御預りの短刀紛失とや。

侍　御役人中殘ず御立合ひ少しも早く御詰所へ御出でなされとの儀でござります。

（ト侍言捨て、若衆の中間付き、上手へはひる。後兩人驚き、）

繁之丞　短刀の紛失といひ、かてゝ加へて父の御最後

三平　繁之丞様。

繁之丞　三平。

兩人　何としたものであらう。

（ト兩人思入れ。時の鐘、合方にて。）

本舞臺三間、後黒幕、一面黒塀、用水桶、振よき見越の松、總て大江家塀外の體。時の鐘にて道具留る。

（ト時の鐘すごき合方に、塀の内より松を傳ひ、清吉にて好みの鬘同じ拵へ、短刀を腰に差し、頰冠にて忍出て、用水桶を足臺にして舞臺へ下り、邊りへ思入れ。）

清吉　大江家の大部屋にごろ付て居たが、此頃のまんの惡さ。負けて／＼負け盡し、ふつと浮んだ出來心で、寶藏へはひつた所が間の惡い時はいかねへもので、金といつたら目に掛らず、大事相に二重箱に入れて有つた。（ト腰に差したる短刀を取り、）此刀、どこか金に成りさうな代物。コリヤ短かくつて用心に懷ろへ入れて居るに飛んだいゝわい。（ト短刀を懷ろへ入れて、）こいつアべら坊に腹がへつてきた。蕎麥屋でも來ればいゝ。

（ト時の鐘、騷ぎ唄の合方、上手より夜蕎

麦賣り荷を擔ぎ、呼びながら出る。清吉見て、）

ヲイ／＼蕎麥屋一つ杯（ぱい）下ッし。

そばや　ハイ蕎麥は何を上げませう。

清吉　塵芥（ごみくた）の入（へい）つたのは嫌だ。唯のぶつかけを熱くして下ッし。

そばや　ハイ／＼只今上げます。

（ト捨臺詞にて蕎麥を盛つて出す。清吉喰はうとする。塀の内バタ／＼と音して上手黒塀板をめり／＼壊し、以前の紋三抜刀にて出る。清吉見て荷の蔭へ隱れる。蕎麥屋怖り腰の抜けし思入れ、ふな／＼震へる。紋三かまはず傍の荷の行燈にて血刀を見て手拭にて拭ひ、鞘に納め、花道の付際（つけぎは）迄行き、蕎麥屋を見て切つて仕まはうかといふ思入れ。蕎麥屋怖りし、手を合せ拜む。紋三見てにつたりと思入れ。此時知らせに付き、日覆より火入の月出る。是を見て紋三懷中より以前の連判状を出し見乍ら、ゆる／＼と空へかざす。是を謠への端唄になし、紋三連判を見乍ら悠々と向うへはひる。此内荷の蔭より清吉出て、紋三の後見送り、）

清吉　今の侍はまだ年も若い男だが、確か人を殺した樣子、町人と違つて悠々と落付いたものだ。若いにしちやアいゝ度胸だ。

（ト清吉井の蓋を叩くを木の頭。）

エ、延びてしまつた。

（ト清吉蕎麥をかつこむ。蕎麥屋やはり震へる。此見得よろしく。派出なる唄にて。）

拍子幕

千秋萬歳

第一番目五立目返し

初瀬小路妾宅の場

（北條殿樣御色縫の二幕目なり。略す。）

小袖曾我薊色縫

第壹番目大結

箱根賽河原の場
同　湖水對面の場
同地獄谷闇戰の場

一近江小藤太成家　ニヤク　小團次
一鬼坊主淸吉
一八幡三郎行氏　ニヤク　三十郎
一地獄婆ア　お谷
一曾我箱王丸　ニヤク　權十郎
一八重垣紋三
一曾我十郎　ニヤク　納升
一蔭山繁之丞
一工藤犬坊丸祐友　羽左衛門
一古池順齋　村右衞門
一因果者一寸法師のちよこ平　小半次
一狩人狼の山九郎　米五郎

一一寸法師のおちよぼ　吉六
一鷄娘のおけつ子　權内
一神主祇念左司馬　しぎ藏
一狩人一　竹介
一同二　麥藏
一同三　玉藏
一同四　出來藏
一鬼坊主女房十六夜おさよ　粂三郎
一捕人六人　相中立衆

本舞臺三間の間、一面の山幕、杉の立樹同じく釣枝。爰に烏帽子羌拔ゆだすきを懸け、神主の形にて松明を持ち、外に四人山たつつけつゝぽ狩人形の上へ白張を引つかけ、烏帽子を冠り、注連を張りし神事裝束入と印せし長持に立懸り居る。此見得、山颪にて幕あく。

神主　時に狩人衆、昔から年々歲々地獄谷の山神祭りは此箱根の山中に住む氏子の者が各番に岩戸神樂をつとめるが役・輩と違つて夜祭り故、皆の衆も御苦勞でござる。

狩人一　何、これが每晩するといふではなし、年に一度の山神祭り、何んの苦勞な事がありませう。

狩人二　山神樣の御機嫌が惡いと、何時も山が荒れ狩人仲間は大難義だ。

狩人四　何んでも機嫌が惡いよりいゝ樣に、今夜は是からおくびに出る程夜通しお祭をするがいゝ。

狩人三　ア、コレ〳〵假にもそんな事云はつしやるな。山神樣のお氣に障ると直きに罰が當たるぞ。

狩人一　罰でも何んでも初春早〳〵當るといふは緣起がいゝ。

狩人二　さうだ〳〵。何んでも狩人と芝居者は、當らにやア錢にならねえ。

神主　イヤあたるといへば今日は又鎌倉から權現樣へ、當時一﨟別當の工藤左衛門祐經が御參詣だといふ事だが、定めて社内の掃除番に村の衆が當つたらうな。

狩人四　隣の甚太に向うの傳次が掃除番に當つて行つた。

狩人三　そいつア長持を擔ぐより二人樂で大當りだ。

神主　何にしろ、もうそろ〳〵山も櫻の咲く時分だが、峠に雪があるせいか滅法に寒いではないか。

狩人一　それがいゝ〳〵。野篝へ行つて大當りにあたらうぢやアねへか。

三人　それがいゝ〳〵。

神主　サア〳〵いづれもござれ〳〵

(ト山嵐にて神主先に皆々上手へはひる。
これにて知らせに付き、山嵐にて山幕明
ける。)

本舞臺眞中に二間程の石地藏、後(うしろ)に小高き
岩山杉の檜を見せ、上下出つぱり岩の張物、
日覆より杉の釣枝、雨落一面に葺き、岩山
杉の檜よろしく山嵐にて道具納る。

(トやはり山嵐にて上下より三人づゝ六人
黒ぬめの四天拳鉢巻捕人の拵へ、上へ赤合
羽を引つかけ出て來り。)

五人　軍八殿。

軍八　コリヤ。

(ト靜かな禪の勤になり。)

此程お家の重寶たるみどり丸の短
刀を奪ひ、舅薩山武太夫を討ち、
逐雷なせし八重垣紋三。

捕手一　召捕る役を蒙りしは則ち短刀
預りの武太夫が悴繁之丞。

捕手二　なれども未だ若年故、見え隱
れに附添ひ、搦め捕れよと上(かみ)より
言付け。

捕手三　最前麓で見かけたる深編笠の
浪人こそ正しく尋ねる八重垣紋
三。

捕手四　賽の川原の石地藏を小立に取
つて搦め捕らん。

捕手五　然しきやつは八重垣流の一流
を極めし者なれば、

軍八　いづれも油斷さつしやるな。

五人　心得た。

軍八　忍ばつしやい。

(トやはり禪の勤にて上下地藏の影へ別れ
て忍ぶ。禪の鞘打上げ、本釣鐘誂への相方、
これへ鶯笛蛙の聲をあしらひ、誂へ朧月を
おろし、花道より紋三、深編笠着流し大小、
浪人の拵へにて出て來る。東の歩(あゆみ)より繁之
丞の役、同じく深編笠着流し大小、浪人の
拵へにて出て來り、一時に花道へ止り。)

紋三　春宵價千金と實にや箱根の春
景色、雪解に笑ふ山々の、流の水
の底倉に、鳴くや蛙の歌袋。

繁之丞　谷の戸出し鶯も、まだ笹鳴の
片言に、ほうほけきやうの時を得
て、はる〳〵爰へ如月に、梅がか
しきの猿すべり。

紋三　月影のぼる山中に、人目の關
を憚りて、忍ぶ此身の朧影。

繁之丞　野邊には萌ゆる若竹の、緣色(ゆかり)
そふ深編笠、深き惠(めぐみ)の宮の下。

紋三　よし足物の道さへも、白水坂
の九十九折。

繁之丞　旅路に憂を双六の、吉日を祈
るさいかち坂。

紋三　東に見ゆる塔の澤、

繁之丞　西には賽の川原あり。

紋三　千鳥音を鳴く湖に、

繁之丞　二ツ巴の双子(ふたご)山。

紋三　思ひ大澤、
繁之丞　木賀の里。
紋三　ハテ風情ある、
繁之丞
紋三　詠めじやアなア。
（ト兩人思入れ有つて右の鳴物にて本舞臺へ來り行合ひ、笠の内見ようとする。思入れ有つて、紋三上の方へ行くを繁之丞腰を捕へ引戻すを振拂ふ。急となつて、）
紋三　見れば笠にて面を隱す我に等しき御浪人。何故有つて身共を支へ召さるのだ。
繁之丞　木の間隱れの月影に朧ながらも親の仇、八重垣紋三と見た故に。
紋三　アヽ、扨は一旦兄弟の因を結びし繁之丞よな。
繁之丞　倶に天の載かざる親の敵を討たんずと、汝が行方を尋ねし某。
紋三　我も何時ぞや廻り合ひ、勝負なさんと思ひしに、
繁之丞　折よく今宵出合ひしは、場所も名におふ箱根山、
紋三　賽の川原の石地藏。
繁之丞　常念佛の極樂も、
紋三　落れば下は地獄谷、
繁之丞　娑婆と冥途の別れ道、
紋三　いでや此場で、
（ト兩人一時に笠を脱ぎ捨て、）
兩人　勝負をなさん。
（トきつと見得あつて紋三繁之丞の傍へ寄り、）
紋三　仔細有つて汝が父蔭山武太夫を討ちし某、名乘合うて勝負なし、見事討つて手柄にせよ。
繁之丞　いかにも親の敵故、討ちて手柄に致したけれど上の疑ひかゝりし紋三、盜賊故に今は討たれぬ。
紋三　何この紋三を盜賊とな。
繁之丞　何時ぞや父を討ちし夜に、寶藏に秘め置きし我が預りのみどり丸、紛失なして行方知れず。正しく汝が奪ひしと上の仰せに打手の某、誠侍の魂あらば、その夜汝が奪ひ取りしみどり丸を我に渡し、名乘合ひして勝負なせ。
（トこれを聞き、紋三悔りなし、口惜しき思入れ有つて、）
紋三　コハ覺えなき盜賊の惡名、みどり丸を奪ひしなぞとは、此身にとつて覺えなし。言ひかけせずと繁之丞、我を討つて父の手向になせよ。
繁之丞　たとへ何程諫ずるとも、短刀戻さぬ其内は、いつかな討たぬ八重垣紋三。
紋三　デモ覺えなき短刀を、何とて

汝(たれ)に渡さうや。

繫之丞　ヤア渡さぬ上は上の四人、縄うつて引く覚悟なせ。

紋三　しやらくさい覚悟呼ばはり。よしや殿の上意にもせよ、覚えなければ縄目は受けぬ。

繫之丞　異儀に及ばば手込になし、繫之丞が縄かくるぞ。

紋三　ム、汝が父は討つたる故、武士の情に討れてやらんが、身に覚えなき疑ひ受け、縄目の恥辱受けうならば手柄に搦めて見よ。

繫之丞　云ふにや及ぶ。いづれもそりや。

(ト繫之丞小石をとつて石地蔵へ打付る。上下より以前の捕人ばら〳〵と出て紋三をとり巻く。)

繫之丞　八重垣紋三。

六人　覚悟なせ。

紋三　扨は後より某を搦めとらん手立(てだて)よな。斯く多勢にて取巻く上は、縄かかる義理もうこれまで。八重垣流の覚えの太刀先、ならば手柄に請けて見よ。

繫之丞　三枚橋より後を付け、爰にて捕らん兼ての手筈。サア尋常に縄に掛れ。

紋三　何を小癪な。

(ト禪の勤になり六人十手にて打つてかゝる。紋三これを相手に立廻り、繫之丞下手岩臺へ腰を掛けて見て居る。紋三石地蔵へ上り、六人を相手に一寸立廻り、紋三肌脱ぎになり、又々六人と立廻り、此内繫之丞肌脱ぎ、下緒をたすきにかけ、十手を持ち、身搆へなし、よき程に繫之丞、紋三へ十手にて打つてかゝる。是より両人面白き地蔵の捕物の立廻り、此内へ又捕人かゝつて立廻り、トゞ六人を左右へ切倒し、紋三繫之丞よき見得にて、知らせに付きせり上げ、詠への鳴物になり、三尺程引上げ又両人立廻り、繫之丞過つて谷間へ落つる。)

ヤ、繫之丞には過(あやま)つて谷間へ落ちしか。我も續いてヲ、さうだ。

(ト同じく後口の谷へ落込む。舞臺はやはり右の鳴物にて石地蔵を段々とせり上げる。地蔵の壘石より下一面の山幕付いて上る。よき所にて幕切つて落す。)

本舞臺向う小道具の二重岩組の蹴込み、後奥深に杉林、湖水の遠見、上手に一間の手水鉢、庵に木瓜の紋付、雨除の家根、軒口に鎌倉大名紋散しの納手拭、平舞臺上下に切破りの藪畳、總て箱根塔ノ沢入口の體、山裏にて道具納る。

(ト向う揚幕にて、)

大勢　ハイホヲ。

(ト行列、三重大拍子の入りし詠への鳴物になり、向うより三階の揃肩板中間二人、庵に木瓜の紋付けし箱提灯を持ち、二行に並ぶ。同じ金紋付きの挾箱せうぶ皮羽織袴股

立二人これを擔ぎ、此後より絹羽織袴股立の侍四人二行に並び、同じ形の長刀持、長棒本乗物紺肩衣六尺四人擔ぎ、始めに中間二人箱提灯を持ち、此後より小藤太鉢かづら持の上下、股立大小吉例の拵へ、同八幡三郎付き出て來る。此後より十德形の醫者せうぶ皮形の茶瓶かつぎ紺肩衣の中間大勢羽織袴股立の御二人、總て此行列三階の人數總出、皆々本舞臺へ來り、乗物を二重へあげ。）

近江　お乗物立てませい。

六人　ハ、ア、。

（ト二重眞中へ乗物を直し、上手に近江下手に八幡、行列の人數後ろに並び、平舞臺上下には箱提灯、三階の中仲四人控へ、よろしく夜神樂の入りし謡への鳴物にて。）

近江　いかに方々。今我君の御威勢は鎌倉山の星月夜、伊豆相模にひかり顕れ、誰一人祐經様に肩を並ぶる者無く、すでに一臈別當の職に登りし大々名。

八幡　それ故、此度皐月下旬の富士の御狩の惣奉行、頼朝公より命ぜられ、役目首尾よく勤める様にと、則ち箱根権現へ奉幣祈念の御參詣。

近江　誠や御先祖祐經様より一度御家衰微なせしも、

八幡　再び返る三ケの所領、館も花咲く梅ケ谷。

近江　時めく春に相生の近江八幡兩人も、

八幡　君の惠みを身にうけて、枝葉榮うる松ケ岡、

近江　千歳祝うて鶴ケ岡、

八幡　萬歳壽く龜ケ谷、

近江　礎かたき、

八幡　御家の繁榮、

近江　只々御目出たう、

皆々　存じまする。

（ト皆々乗物へ辭儀をなす。此時風の音になり、上下の屋臺の影へ夫食の雀大ぶん舞ふ。兩人これへ目を付け、きつとなつて。）

近江　ハテ心得ぬ。野に伏勢ある時は歸雁連を亂すとかや

八幡　夜鷺に是なる藪蔭より塒放れて飛かふ小鳥。

近江　今太平と云ひながら、頼朝公のお覺え目出度き主人左衛門祐經様。

八幡　大小名の其内に恨む輩のあらんも知れず。

近江　聞けば河津の三郎が忘れ形見の二人の悴、父の敵と狙ふ由。

八幡　例へ何程狙ふとも蟷螂が斧、及ばぬ事。

近江　何にしもせよ怪しき藪影。

八幡　人こそあらん詮義致せ。

中間二人　心得ました。

（ト兩人ツヽト左右の鼓の内へはひる。直にばた／＼になり、左右より一人づゝ見事に返り出る。直に鼓臺を押分け上手より祐成の役、着流し大小、上手より兒髷、振袖指貫小サ刀にて兩人共ツカ／＼と前へ出る。中間四人掛るを立廻つて左右へ投退け、きつと見得。）

中間皆々　どつこい。

箱王　親の敵祐經觀念。（ト立懸る。）

祐成　コリヤ急(せ)く所でない。早まるな。

（ト對面三重になり、祐成箱王をじつと留る。近江八幡兩人見て思入れ。）

近江　ヤア我君の乘物目がけ、敵と呼ばはる無禮者。

八幡　正しく二人(ふたり)は河津が悴、忘れ形見の兄弟なるか。

祐成　如何にも我は兄の一萬。祐信殿の養子となり、十郎祐成。

箱王　まつた我は菩提のため箱根山へ登つたる腕白者の弟箱王。

近江　扨こそ主人を敵呼ばはり、年端もいかねへ身の上で、

八幡　當時一﨟別當たる我君左衞門祐經樣へ、

近江　刄向ひ立ては及ばぬ事だ。かくいふ近江の小藤太成家。

八幡　八幡三郎行氏がお傍になくばいさ知らず。

近江　どつこい。

八幡　そつけへ。

兩人　ヤリヤアしよねえか。

（ト兩人きつといふ。箱王何をと立ちてかかるを祐成留むる。此時乘物の内にて）

犬坊丸　兩人控へい。

近江　ハツ。（ト兩人控へる。）

祐成箱王　アノ聲は。

近江　工藤の嫡子。

八幡　犬坊丸。

兩人　祐友樣。

（ト小鼓の合方になり。乘物の戸を明ける。内より犬坊丸若衆髷、棒茶筌長裃に小サ刀にて、結羽織の侍床几を直す。犬坊丸是へかける。）

箱王　扨は祐經と思ひの外。

祐成　犬坊丸にて、

兩人　ありしよなう。

犬坊　父祐經所勞に付き、名代として某が則ち箱根權現へ奉幣祈念の此參詣。

箱王　エヽけふ箱根への參詣を待ちもうけたる甲斐もなく思へば。（ト箱王立ちかゝるを）

祐成　コレ立騷いで尾籠な弟。急(せ)いては殊に神の前、只何事も兄にまかせて。

箱王　デモ。

祐成　じつと心抱しやいなう。（ト近江思入れ有つて、）

近江　行氏お見やれ。見れば見る程二人が面差し、なんとよく似たではないか。

八幡　成家がいふ如く、親子とて争はれぬ。ア、似たは〳〵。

犬坊　何似たとは誰に。

八幡　犬坊さまには御存じなけれど、川津の三郎祐康に。

犬坊　スリヤ兄弟は一家たる川津殿に似たるとか。

八幡　生寫しなる二人が面差し。アア親はなくとも子は育つとは、ハテよく言つた事だなア。

近江　いかさま二人の兄弟も、まだ其時五つか三つ。

祐成　十八年の其間父が最後のその無念。

箱王　忘れもやらぬ此年月。

近江　親を討たれて無念なか。

箱王　さん候ふ。

近江　口惜しいか。

箱王　さん候ふ。

近江　さもさうず、さもあらん。然し河津を討ちたるは主人祐經様ではない。股野の五郎景久なるは。

祐成箱王　なんと。

（ト大小入り、合方になり、）

近江　思ひぞ出づる其時は安元二年神無月十日あまりの事なりしが、伊豆相模の若殿ばら、赤澤山の晴(は)れの角力、股野は聞えし力强、二十一番勝になり。

八幡　廣言吐きしを憎(にっ)くしと、祐康土俵へ飛入つて、股野を投げし河津懸け、已に角力も夫迄(それまで)と天晴力者の祐康殿と勝誇つたる歸り足。

犬坊　ヲ、聞及ぶ其時こそ、河津殿の出立は、秋野の摺つたる狩衣に、千段籐の弓携へ。

祐成　竹笠さつと木枯に吹きそらし、村月毛に股がつて。

箱王　絶所悪所の嫌ひなく、しんづ〳〵と歩ませたり。

近江　スハ祐康よござんなれと柏ケ峠の南尾崎、椎の木三本小立にとり、一のまぶし二のまぶし。

八幡　きつと放せば過またず、河津が乗りたる駿足の鞍の山形討ちけづつて。

犬坊　むかはぎの膏際より前へすつぱと射通したり。

祐成　萬夫不當の父上も大事の痛手にたまり得ず。
箱王　馬よりどうと落(おち)こちの露を消したる無念の最期。
（ト兩人口惜しき思入れ。）
近江　サ、河津を討つたは股野の景久、祐經樣には御存じない。疑ひ晴して早く歸れ。
箱王　イ、ヤ討ちしは左衞門祐經殿、包み隱すは卑怯未練。
祐成　なぜ名乘つては討れぬぞ。
八幡　例へ主人が敵にもせよ、皐月下旬賴朝公が富士の御狩の惣奉行、役目からむる上からは討つ事ならぬ祐經樣。
祐成　スリヤ皐月下旬の狩くら迄。
箱王　討つ事ならぬか忌々(いめへ)ましい。
（トきつと思入れ、犬坊丸こなしあつて、）
犬坊　何はともあれ一家の某、けふ初めて參會故、父にかはつて些少の家づと。
（ト服紗包の二枚の切手を出し遣る。祐成とつて開き見て、）
祐成　ヤ、コリヤコレ狩場の、
箱王　二枚の切手。
近江　何ゆへそれを。（ト立かゝるを、）
犬坊　めぐり逢ひなば渡せよと則ち父の筆で言付け。
八幡　流石は我が君。
祐成　敵ながらも。
箱王　情の賜物。
犬坊　只何事も。
祐成箱王　皐月下旬。
近江　まづそれ迄は。
祐成箱王　工藤祐友。
犬坊　祐成箱王。（ト犬坊丸乘物へはひる。）
近江　ハテ珍らしい。
（ト乘物を上るを木の頭。）
皆々　對面ぢやなア。
（ト六尺乘物さし荷げ、左右に近江八幡中間隨ひ、紋提灯の箱提灯を差上げ、箱王きつとなる。祐成支へ、此見得引張よろしく山颪カケリにて。）
拍子幕
（ト此幕以前の山幕を引き、山崖好みの合方になり、向うより五十日の醫者順齋白張の提灯を下げ出て來り。）
順齋　ア、遠い／＼と、里と違つて山中は二月になつても此寒さ。早く宿屋へ泊りたいものだ。（ト云ひ乍ら本舞臺へ來り、）扨々人の身の上は浮き沈みのあるものだ。愚老も元は按摩鍼だが、大江の家を押領なさ

んと兼て無叛の氣ざしのある武太夫殿に取上げられ一味合體成したる所、武太夫殿が紋三に討れ、立身出世の綱も切れ詰らぬ上に連判状が殿様の手へはひる時は、一味の者は首道具、聖人危きに近寄らずと、衣類家財を祕かに賣り、まとめて金が五十兩。（ト懐ろより財布を出し見て、）是を路金に都大阪、大和巡りをした所が、梅川といふ色もなければ、まさか二分に成りもしまい。何んにしろ更けぬうち早く何處ぞへ泊りたいものだ。勝手を知らぬ山道に、折惡しく眞暗ゆゑ、此後の庵室で貸してくれたこの提灯、白張といふ物はなんだか不氣味な嫌なものぢや。（ト順齋氣味の惡き思入れにて。）ア、よく人が野暮と化物は箱根から先きといふが、爰はもう中程だから化物がゐるかも知れぬ。どうぞ出合ひたくないものだが。

（ト時の鐘、どろ／＼の様な山颪、向うより因果者の一寸法師の夫婦、はけの長い奴、あたま同じ赤い布（きれ）を懸けし仰山な島田髷、兩人手を引合ひて出て來り、）

一寸法師　コレおちよぼや。きのふ買ひに來たのは大阪か。

ちよぼ　何、江戸の兩國サ。

一寸法師　江戸ならどうぞ行きたいものだなう。

ちよぼ　行きたいと云つたつて、外聞の惡い。お前（めへ）とわたしと角力をとつて投られる度に岩戸を見せろとわたしや恥かしくつて嫌だよ。

一寸法師　そいつアいゝぢやアねえか。見物よりおれがたのしみだ。

ちよぼ　助平な事を云ひなさんな。毎晩見てゐる癖に。

一寸法師　何んにしろ、いゝ加減に出かけようぜ。

ちよぼ　ほんに雑用斗り溜つていかないよ。

一寸法師　サア早くお祭りへ參つて來よう。

（ト本舞臺へ來り、此内順齋提灯あかりにて煙草を呑み乍ら二人を見て、）

順齋　しめた／＼。やう／＼人に出合つた。モシ／＼此近所に旅籠屋はござらぬかナ。

ちよぼ　此近所には一軒もない。山中迄行かなない。

順齋　山中迄はどの位あるな。

ちよぼ　一里半もありませう。

順齋　それは夜道に困つた事だ。

ちよぼ　モシお困りならわたし共の居る所へ御出でなさいな。

順齋　スリヤ泊めて下さるか。それは御深切に忝い。（トいひ乍ら兩人の姿をとつくり見て恟りなして引つくり返り、）いや化物だ／＼（トふるへる。）

一寸法師　これさ／＼。旅人、化物ぢやアねへ。見せ物だよ。

ちよぼ　何がそんなこわいのだよ。

（ト一寸法師順齋の傍へ來てはつと口を明く。警者ふるへ乍ら逃げようとして逃られぬ思入れ。）

順齋　これが怖くなくつてどうするものだ。頭が大人で體が子供、箱根も半分來ぬにもう化物に出られては、これから先へ行かれぬ／＼。

一寸法師　エ、此人は何をいふのだ。狐にでも化されたのか。

ちよぼ　こんな分らない人にかまはずと、早く行かうぢやないか。

順齋　どうぞ行つてくれ／＼。（ト順齋はふるへる。）

一寸法師　そりやアさうとおけつぼはどうしたらうな。

ちよぼ　大方先へ行つたらうよ。

一寸法師　ハア歸られねじやねえか。

警者　ハア歸られてはたまらぬ／＼。

（ト花道の方へ逃げようとして腰の立たぬ思入れにて順齋もがく。）

一寸法師　イヤ飛んだ化物だ。

（ト右の鳴物にて兩人は上手へはひる。順齋振返りほつと息をして、）

順齋　ヤレ嬉しや／＼化物が行つてしまつた。扨々箱根といふ所はこわい所だわへ。

（ト又向うより芥子坊子の島田髷、赤い布をかけ、拵へものゝ鷄の足にて出て來り、）

ヤア／＼又ちいさい娘が出て來た。これは誠の人間だ。コレ／＼おむす、旅籠屋はどこであるか。よい子だ教へて吳りやれ。（ト鷄の足、大きな聲をして、）

鷄の足　とつけつこう。

順齋　ア、大きな聲だ。恟りしたので何だか分らぬ。旅籠屋はどつちの方だよ。

鷄の足　とつけつこう。

順齋　何んだと。

鷄の足　とつけつこう。

順齋　エ、此娘は何をいつても。

鷄の足　とつけつこう。

（ト順齋鷄の足を見て恟りして引つくり返り、）

順齋　ハア、此マア是は化物だ／＼。

鷄の足　とつけつこう／＼。（ト鷄の足よ

た／＼と上手へはひる。）

順齋　ヤレ来るものも／＼誠の人に合ひたいものだナ。（ト懐ろから金を出し）何んにしろ物騒なのは五十兩、どうか猪も居さうだから定九郎でも出にやアよいが。

（ト此時後へ、山九郎狼の頭を頭巾になし、同じく皮の袖なし達付、山刀狩人の拵へにて後ろへ出で）

山九郎　物騒なその金、おれが預からう。

順齋　ヤこなたは。そりやこそ猪の代りに狼だ。

山九郎　風祭から足を付け、爰迄汝を送り狼、四の五の云はずと渡しやアがれ。

（ト財布へ手をかけ取らうとする。順齋すがり付き、）

順齋　是は命と釣替へだ。狼でも化物でもこの金斗りは渡さぬ／＼。

山九郎　エ、やかましい。放しやアがれ。

（ト禪の勤になり、狩人ひつたくる。順齋渡すまいとすがりつき、これをかせに立廻りあつて、トヾ狩人財布をくわへ、舞臺前のきり穴へ飛込む、順齋うらめしさうに下を見て）

順齋　ア、悪い事はしねえものだ。とう／＼金を取られて仕舞つた。然しまだ化物めらに命を取られぬが仕合せだ。

（ト上手より以前の一寸法師おちよぼ鶏の足三人出て来り）

一寸法師　まだおめへまごついてゐるか。

ちよぼ　道が知れざア一所にお出で。

（ト順齋見て恟りなし）

順齋　ハア、又化物が。

鶏の足　とつけつこう。

順齋　こいつはたまらぬ。（ト花道へ逃出し足立ぬ思入れ。）

一寸法師　これさ待ちねへと云つたらヲ、イ／＼親仁どの。

（ト大津絵ぶしの合方に鳴物入れで一寸法師歌ふ。おちよぼ鶏の足踊る。）

その金こつちへかしておくれ。

順齋　金はとうにとられて仕舞つた。

一寸法師　與一兵衛恟り仰天しイエイエ金ではござりませぬ。

（ト一寸法師手拍子にて歌ひ、おちよぼ鶏の足踊り乍ら、花道へ行き、順齋後をつき唄ひ乍ら振りに成る。）

順齋　娘がしてくれた用意の握り飯、お先へ参じませう。（ト先へ行きかける。）

ちよぼ　これさ待ちなせへ。一緒に行

かうよ。

順礼　一緒に行きやれこたまるものか。

（ト右の鳴物に早めて順礼向うへ逃げてはひる。三人後を追ひかけてはひる。鳴物打あげ、知らせにつき、山幕を切つて落す。）

本舞臺眞中に大樹の杉大洞、是に山神祠といふ白の段帳。杉の根高二重程の高さ三方へはびこり、足懸りになりて上り下りをする事。上下杉の林、日覆より同じく釣り枝、向う奥深く箱根山夜の遠見、下の方に篝を焚き、凡て地獄谷山神祠の體、山颪にて道具納る。

（ト山颪打上げ、奥にて。）

呼び　神事始まり。

（ト呼ぶ。これをきつかけに岩戸神樂の入りしせりあげの鳴物になり、舞臺眞中上手に三十郎金襴の誂への頭巾、天狗の面を冠り、紺地錦の狩衣、白地錦の大口、高足駄しでの付し榊へ八非形の名鏡を結び付け、是にて以前の狩人を引付け居る。下手に天冠絲たれ鈿女尊の面をかむり、紫錦の舞衣、緋の小袴、白の幣束を肩にかけ、狩人に目を付けゐる。此見得にてよろしくせり上げ、鳴物打上げ、山颪になり、狩人𢌞返し行かうとするを、鈿女の形支へる。たち〳〵として猿田彦に行當る。猿田彦突廻して狩人を投退け、その儘岩臺へ腰をかけ榊を突立て持ち、猿田彦の見得。此折狩人財布を落すを、鈿女の形拾ひ懐へ入れる。狩人それをとかゝる。鈿女の役狩人を幣束にて留め、急度見得。是へ岩戸神樂を打込み、鈿女の役狩人を相手に立廻り乍ら舞に成り、よき程に鈿女の役狩人を突く、此はづみに天冠絲たれ面落て、いがくり頭、好みの鬘になり、是と一時に猿田彦の役、頭巾をとつて捨白、髪髷老婆になる。狩人を引つけ左右急度見得。誂への鳴物に成り、狩人老婆に組付くを振拂ひ、これにてうへたけて下は世話形、荒磯の襷をかけたる拵へ、散切の役、片肌脱ぐと下は廣袖惡婆の拵へにて、兩人急度見得。これにて篝消す。鳴物變つて老婆、惡婆の懐より財布を引出し、これをかせに立廻り、狩人此内へ割つていり、財布を引つたくり、ツカ〳〵と木の根をあがり、祠へはひらうとする。内より段帳を引切り、寢月代のびしひとつ竈、好みの世話形、(ママ)てゐたる心にて狩人を引付け、片手で伸びを仕乍ら、寒いといふ思入れにて身震ひをなし、すう〳〵しく狩人を探ぐり見て手にさはる財布を引つたくり、見事に下へ投のけ、杉の根の祠にて急度見得、此内惡婆(ママ)老婆もさぐり合ひて狩人が返りし音にて左右へ分れ、(ママ)と一緒に三方へ一時に見得。是にて又時代と世話の誂への鳴物に成り三人だんまりの立廻り。能き程に老婆後ろへ身を引き腰より手拭に包みし出刃庖丁を出し、手拭をとる。此内(ママ)の胸倉をとり、ぐつと引つける。風の音になり消えたる篝ぱつと燃え、兩人顔見合せ殉りなし。

清心　ヤ十六夜か。

十六夜　清心さんか。

清心　コレ。

（ト手を放す。老婆割つて出て庖丁にて突いて懸る。一寸立廻つて此中へ狩人かゝり、清心の懐より金を引出す、清心引つたくり口にくはへ下手へ投退ける。老婆土手にて庖丁を振上る。清心眞中にて尻をはしよる。

十六夜は狩人を押へ付ける。これにて三方見合せて木の頭、老婆横向にてきつと見得、清心は笠を手に持ち老婆へ詰寄る。十六夜は起上らうとする狩人をじつと押へ、上手を倒ふ、此見得山嵐、ホケリ早き大拍子を冠せ。よろしく。

拍子幕

第二番目二立目

雪の下白蓮本宅の場

（花街模様薊色縫の三幕目なり。略す。）

第二番目三立目

名越無縁寺の場

同裏門捕物の場

（花街模様薊色縫の四幕目なり。略す。）

川柳雑俳集（柳多留）正誤表

頁	段	行	誤	正
二九七	上	二	ゝかれず	たゝかれず
二九八	下	一五	田舎芹	田舎芋
三〇〇	上	一五	四十過ぎ	四十三
三〇一	上	九	歌になり	歌（敵っし）になり
〃	下	一四	鬼で目を	鬼で目を
三〇二	中	四	その手代 の下女	その手代その下女
三〇四	中	五	みそげて	みそけで
三〇四	下	一六	外科醫者を	外料を
三〇五	下	四	初見世	切見世
三〇六	上	一〇	車座に	車座へ
三〇七	上	二二	病犬を	病と犬
〃	中	七	樋合（ひあひ）	樋合（ひあはひ）
〃	下	一三	いじかられ	いじめられ
三一〇	下	七	山伏が	山伏は

頁	段	行	誤	正
三一〇	下	一八	親達	親類
三一一	上	七	安く	安い
〃	下	四	ゆいとばし	やいとばし
〃	下	二〇	ばり合	はり合
三一三	中	二三	ばんござへ	ぼんござへ
三一五	上	一九	米あけざる	米あげざる
三一六	中	一	小半町	小半時
三一八	下	[illegible]	さして	さしで
〃	下	一七	小歌の	小宿の
三二三	下	二	そゝり貝	そゝり唄
三二五	下	一五	しら使	しち使
三二六	下	二三	簑市に	蓑市に
三二七	下	一	かきを	かきを下げ
三三[illegible]	下	一〇	ぴれつかす	ばれつかず
三三四	下	[illegible]	二足	二タ足

三四〇	下	一四	乳母の。	乳母は。
三四一	上	一	流行る也。	入りがあり
三四四	下	一八	槍などは	槍ならば
三四六	上	三	御出でたぞ	御出だぞ
三四七	下	一一	元の木	元の木
三四八	上	一九	なるたけ人を。	なりたけ人は。
〃	下	三	生酔の。	生酔は。
三五二	下	一八	見るはふかいなか。	見るはふがいなし。
三五七	下	七	門禮に	門ト禮に
〃	下	一九	おッぴとき	おッぴらき
三六〇	上	三	ひつたくり。	ひつたくる。
三六二	下	一九	割つて	刹つて
三六三	中	九	二歩	一歩
三七四	下	一	過ぎたてで	過ぎたで
三七五	上	一五	どのうちへ	どのうらへ
〃	下	四	弓杖を	弓ン杖を
三七七	下	一三	居らぬ	居ぬ
三八五	中	一四	萬ざいより	萬ざいよりも。
三八六	下	四	間男も	間男は。
三八七	上	一〇	よいお寺	よくお寺
〃	下	九	置いも	置いても
三八八	中	一	初まぐろ	まぐろ賣
三八九	中	五	つぼ	株
〃	下	一一	門と成り	門トに成り
〃	下	七	居り	居る
三九二	下	一六	しまつたかと	しまやつたかと
四〇一	下	一	いんぎんに	いんぎんこ
〃	下	一二	いつとはなしに	いつともなしに
四〇三	中	一〇	むすこふふんと	むすうふふんと
四〇七	下	〃	青	音
四一一	中	四	高足	高ウ足
四一三	中	一六	「ていしゅをば」の次へ 五萬石すてれば五百石ひろひ	
四一四	中	四	「誹合」の次へ 刄物ざんまいの馳走が落度也	
四一六	下	九	「どばの犬」の次へ 初まぐろ根津へへな／＼かつぎこみ	
四一六	下	一六	「諸襲の」の次へ 書置はめつかりやすいとこへおき 乗物のすだれをあげて子をあいし	

頁	段	行	誤	正
四一六	上	一七	「去状を」の次へ 太々ていゝおりになる恥をかき 外聞のするさ女房と下女が論 先度のをまだ縫つてゐる茶屋女	
〃	下	一三	「ほしい顔」の次へ 抜きどこがわるいさかいと公家衆いひ	
四一七	上	二	「百旦那」の次へ とう丸へのるべいわさと物師いひ	
〃	下	九	「六夜また」の次へ 吉原の外聞になる意地を張り お前方本降だよとじやまがられ	
〃	下	一一	「ろくじんと」の次へ ふみやんなと紅葉の下で一歩かし 座敷牢初手は遊里にとらはれる 人口なところもでふさぐ憎い事 十ヲざしを禿起きると出して見る	
〃	下	一三	「むしやあぶ」の次へ 叱られて今朝出たと母苦労がり	
四一八	上	一二	「えゝかけん」の次へ ぽんござへ風のする西の町	
四一九	上	一五	「手ならひ子」の次へ こはさうに四わりをふせる松の内	
〃	中	一	このノ\ノ\	このノ\ノ\が。
〃	中	一五	初め。さと	初さと
四二〇	上	四	太刀に氣が	太刀に熊坂。。氣が
四二〇	中	二〇	「は入るまい」の次へ 勝つた時仕舞ふとこだと愚痴をいひ 鉢巻と繃帯の中不動尊	
四二一	上	二	「かくべつな」の次へ さかい町おとなしぶつて殘される	
四二二	上	二	「年飴張」の次へ 死なば死にやなどゝこはノ\母はいひ	
〃	下	七	「前だれを」の次へ はんてんはよせとたびノ\供へいひ	
〃	下	八	「いさゝかな」の次へ 江戸人だなどゝ野掛は火をはたき してとつた顔で鳥さし吹きやめる 旅戻り乳母はから手でかけて來る	
〃	下	一〇	「母の來る」の次へ 事ぶれをたゝの留守にもてあまし その時は業のはかりの思なり おきノ\の顔へむしんをさしひかへ 竹馬と下女わけのあるていたらく	
〃	下	一三	「初鰹」の次へ 引つぱいで起す娘はきざう也	
〃	下	一四	「なげ入れの」の次へ 裸身へ守をかけてうつてゐる	
四二三	上	四	「かねつけろ」の次へ 不動まで女房を連れる通り者	
〃	上	一六	「それもさうだ」の次へ 擲拾からおなじみと毒をいひ ふんどしの綻までもお針也	
〃	上	一九	「けいせいに」の次へ 色々にからだのかわるばくちうち	

頁	段	行		
			上下の音ばかり聞く年始帳 ありきりのおとぼねな出す野掛道 じやうだんに談義など聞く花屋 碁會所と醫者とへ迎二人り出る すがゞきを律義にひくは出た當座 地廻りの向うへきれる惣仕舞	
四二四	中	二	さとつて	さらつて
四二六	下	八	とう十かへりの	と十かへりの
四二七	上	三	入れなと	入るなと
四二八	下	七	みゝず	めゝず
〃	下	一六	呉服店	呉服屋
四二二	中	五	どうしで	じうして
四三〇	中	一二	きりかへる	きりかへる
四三一	中	七	有るでは三まい	有るで三まい
四三三	上	一〇	「時島」の次へ はらんだを承知でよんでぐちをいひ	
〃	中	六	はつとした	ぱつとした
〃	下	七	夜着一つ	夜着二つ
〃	中	三	見えせんものと	見えせんもんと
四三五	上	四	「嫁の着かへる」を取り二座の二句を入れたる あつかいで村間男は五俵出し	
			坪皿とばか一兩で取もどし	
四二五	中	六	内へれて	内福で
四三七	中	一三	すわる	すばる
〃	下	四	先づ歸る、	先づ歸へし
四三九	上	一	ゆるしやと	ゆるしやよと
四四六	上	三	及び中段一行と二〇行の三句を削る	
〃	下	一七	「つげ口を」の次へ 大雛のおもてゞ小雛しやこたうり 前表はうすきちきりにぶら下り 比類なき雑言を聞く姫歸	
四四八	上	三	乳のらひ	乳もらひへ
〃	上	九	あてごとも	あてこども
〃	下	一	安名	保名
四四九	下	一〇	「備前もの」の次へ とりはものかはとやめない負けた奴	
四五〇	下	一三	「師匠さま」の次へ 間男の切られた所に瓜の皮	
〃	下	一三	お祥月忌	お初月ッ忌
四五一	上	九	「尻まくり」の次へ 四位の少將へ諸太夫疵をつけ	

頁	段	行	誤	正
四五一	下	一	松の木を先へ	松の木をへ先へ
四五三	中	六	「川留に」の次へ きんちやくを切る事色にひしかくし	
四五五	中	五	ゆびさして	ゆびさしで
四五六	上	五	ぜばんいひ	ぜげんいひ
四五七	上	二	「かんばんに」の次へ われ鍋をはじめてなめるはづかしさ	
〃	下	八	大づめに	大つめに
四六〇	下	一〇	島がくれ	島かくれ
四六一	中	三	人	客
〃	中	三	あばた賣れ殘り	あばたが賣れ殘り
〃	中	八	邪道	邪法
〃	下	一	か〻れる	かゝれる
〃	下	一四	夫婦づれ	夫婦つれ
四六二	上	二	錢	金
〃	中	一九	蚊帳	蚊や
〃	下	一七	大屋	大や
四六三	中	一五	しやくせん	しやくぜん
四六四	下	一	傘張るがよし	傘張る方がよし
四六五	上	一	はしりをおろす	はしよりをおろす
〃	上	一五	とツかまり	とつかまり
〃	下	一七	洛中の	洛中に
四六六	上	一三	羽織を	羽織は
〃	上	一四	賽日	齋日
四七〇	下	三	太いは	大は
四七一	上	一五	蠅	繩
〃	中	八	「天蓋屋」の次へ 身ン代がなをると嫁が目立つ也	
四七二	上	三	引もくで	引もゝで
四七三	下	一七	女衒一つ	女衒は一つ
四七四	上	八	嫁土藏	娘藏から
〃	下	三	ゆびさす	ゆびざす
四七六	中	五	ゆめに	ゆめを
四七七	中	六	大三十	大三十日
四七八	下	八	醬者	醫者
四八二	上	一七	塚先に美人が二十人	塚の先に美人二十人

頁	段	行	誤	正
四八四	上	五	「他人宿」の次へ 耳へ口あて間男の異見なり	
〃	中	二	欲	慾○
〃	中	三	「驚を」の次へ 四ツぼんだよと五二べたをほうり出し 間男の外に留守中別儀なし	
四八五	上	二	何ばかが○	何ばかな○
〃	上	四	などて○	などで○
〃	下	二	「しやうばんに」の次へ かんのよい下女間男を持つてゐる	
〃	下	二	「目出たさは」の次へ 世をすてることめんどしく四つ手也	
四八六	上	二	お物な○	お物遠○
〃	上	九	「こいつだこ」の次へ 花に坪皿とはさすが下部也	
四八七	上	二	か○んづく	が○んづく
〃	上	七	ねた○り	ねだ○り
〃	下	四	蚊帳○	蚊や
〃	下	五	仕廻つゝが○	仕廻つたか○
四八八	下	四	半町	○半町
四八九	上	八	とろ坊	ど○ろ坊
〃	下	三	「せんやくで」の次へ けごろ見世地犬のやうに狆を抱き	
四九〇	上	三	女房一歩かし	女房は○一歩かし
〃	上	九	飛んだりとは○	飛んだりと
〃	中	八	旅迎○かひ	旅む○かひ
〃	下	三	○行かれぬ處遠江	○行かれぬ處は○遠江
〃	下	四	二○つ三○つ	三○つ四○つ
四九一	上	四	「かねて用意を」の次へ 人は武士なぜ藏宿にあてがわれ	
〃	上	七	う○出して	うけ○出して
〃	下	一	奏○間	奏聞
〃	下	一	○状を出し	○状出し
四九四	下	六	○ちとかしこ	○いとかしこ
四九五	上	五	互角○	牛○角
四九六	上	一九	婆ア	婆々○ア
四九七	上	九	どけへく	どけへくの○
四九八	上	九	くわつたつな○	くわつだ○つな
〃	下	二〇	(原文不明)	(國?)
四九九	上	一	酒	住?

五〇[illegible]	下	一七	見出を	見世を
五〇三	中	六	「搏りぞめ」の次へ	百負けてこゝにあわれを下女とゞめ
〃	中	二〇	下女が	下女は
五〇四	上	六	萬燈	萬どう
〃	中	一四	「天道様が」の次へ	大名をなぶり額たちよづられる
五〇五	中	一六	小ざらへと	小はらへと
〃	下	二三	大くせつ	大くぜつ
〃	下	二三	もんご	もんが
五〇六	上	九	ほたろびて	ほころびで
〃	上	一六	乗り	乗せ
〃	上	一八	鼻毛を	はひげを
〃	中	一八	おゝなじ	おんなじ
五〇七	上	一〇	禿いツつける	禿がいツつける
〃	上	一九	舟がふれ	舟かふれ
〃	中	三	若旦那	百旦那
五〇八	上	七	近所に	近所だに
〃	上	一〇	こもろ	ころも
〃	上	一七	八百と	八百も
五〇八	下	一五	呼ぶ	よう
五〇九	上	一〇	じやらけなさい	じやうけなさい
〃	下	四	持ちヤれだか	持ちヤれだが
五一〇	上	四	一日	二日
五一一	下	五	道くさ	道ぐさ
五一二	上	二	幾所もに	ゆぐところもに
〃	中	七	おのれあ	おのれまあ
五一三	上	九	中町	牛町
五一七	上	一二	うはごとを	うはことを
五一九	上	三	首桶あけて	首桶ゐあけて
〃	下	八	隣ばかりで	隣はかりで
五二〇	上	二	酔はせなかつた	酔はせたつた
〃	上	一五	家主か	家主が
〃	中	二	八番	八幡
〃	下	一三	番新	はんてん
五二一	中	二	見ともなさに	見ともなさ
五二二	中	一五	よひ	よび
〃	下	三	しぼられる	しぼらせる

五二二	中	七	傾城	傾
〃	下	八	女すり	おんなすり
五二三	中	一五	無い迄	無いとこ迄
〃	中	一九	ごた〳〵	こざ〳〵
〃	中	一九	はかをなげ	ばかをなけ
五二四	中	一	こすり付け	こすり付
〃	下	一九	また	まだ
五二五	下	四	甚三郎	勘三郎
五二八	上	一八	雨がぶり	雨がふり
五三一	下	一七	法事をする	法事する
五三四	上	八	はぎへそ	はぎ人そ（目？原文不明）
〃	中	一三	目なし也	目なし也
〃	下	一〇	「太夫様敷だと」の次へ ひだにかゝる馬にばくちを見せておき	
五三七	下	一六	申留	車留
五三九	上	一〇	見たて	見たで
〃	上	一六	よふうつくしさ	よぶうつくしさ
〃	下	二	六十日目	六十目
五三九	下	一六	ぬけしたり	ぬけ参
五四一	上	四	糸の琴	琴の糸
〃	下	一九	馬おひ	鳥おひ
〃	下	二〇	えりへ手を	しりへ手を
五四四	下	一七	ひツひないひい	ぴツぴいぴい
五四八	上	六	切つたりと	切つたりは
〃	下	三	いとまをくれ	いとまくれ
〃	下	一六	道鬼は仕廻ひ	道鬼仕廻ひ
五四九	上	一五	すそつゞきにも	すそつゞきにも
〃	中	九	[illegible]	纒
〃	下	一〇	ひいた	へいれ
〃	下	一一	高い	高いもの
五五〇	下	一三	醫者となつて	醫者と隣つて
五五一	中	四	遣る	出る
〃	中	四	「黒助の」の次へ 迷ふまいものか持參と裸也	
五五二	下	三	「あのやせで」の次へ 道問へばばくちに付いて行つしやい	
〃	下	八	姑婆	姑婆々

五五三	中	八	醫者はたゝんで	たゝんで醫者は
〃	中	九	三二人	二三人
五五四	上	四	「負けた者」の次へ 雪隱でかゝア殿やと手錠いひ	
〃	上	五	大通な	大通ゥ
〃	上	一四	四つ手	息子
〃	中	一六	ほれらぬ氣で	ほれられぬ氣で
〃	下	一五	「湯もどりの」の次へ しやか十が出たですゝはきげびる也	
五五五	上	一	賣り	賣
〃	上	八	臼を上げ	田を上り
〃	下	六	置く	置き
五五六	上	二	牛戸	牛房
〃	下	一	樽酒	酒樽
〃	下	四	ゆき	ゆく
〃	下	一〇	鳥追ひに	鳥追に
〃	下	一〇	見	み
五五七	中	五	きせるなり	きせるとり
〃	中	一四	切れ〲	切り〲
五五七	下	二	おからが	あからが
五五八	中	二	女郎見せて	女郎を見せて
〃	中	七	今日庚申	今日は庚申
五六二	上	二	小べりさすと	小べりでさすと
〃	中	一六	ことわりて	ことわりで
五六三	中	一四	それ善兵衛	それぜん兵衛
〃	下	二	つまされ	つまされて
五六四	上	一四	折れるやわいと	折れるわやいと
〃	上	一六	喰らひこむ	食ひこむ
五六五	中	五	お袋た	お袋と
〃	中	八	鳥追ひの	鳥追の
〃	中	一六	みらひなり	みらいなり
五六六	中	七	坊主持ち	坊主持
五六七	下	一八	こじきさうを	こじきのさうを
五六八	中	七	おそいから	おそいうら
〃	下	一八	ばゞア川へ	ばゝアは川へ
五六九	上	六	「かゞさん」の次へ うまいことゝ女郎を横に抱いて寝る	
〃	下	三	笑ふことと	笑ふとこ

頁	段	行	誤	正
五七一	上	六	門でいひ	門（川？）でいひ
〃	上	一八	さごさいは	さございは
〃	下	八	口へ寄り	口に寄り
〃	下	一〇	ちる櫻	ちる　櫻木連　かたる
〃	下	二	出し　同	出し　同　同
五七二	上	八	飛ぶ鳥が落つる也	も飛ぶ鳥が落る也
〃	下	五	「どこへもつてゆか」の次へ 間男とべつこんにする氣の毒さ　佐蓮　兎町	
五七三	上	四	合ひにて	合にて
〃	上	一四	しやり	くや〳〵り
〃	上	一五	あつたとさ伊勢じ	あつたとさと伊勢し
〃	上	一九	後家の迄	後家の色
〃	下	一	「關寺の」一句は一四行「三歩だけ」の次へ	
五七四	下	二六	緣遠き	緣遠さ
五七五	上	三	「おきやがれ」の次へ まけるやつよりかゝるのたきさにする　飛鳥川連　五鳥	
〃	上	一四	「かけ取の」一句をとり左の一句を加ふ 改まりました大名女郎也	
五七八	中	二	「新造を」の次へ やかましい筈間男に女房なし	
〃	下	一	みせなと	みせなに
〃	下	七	母ぶしゆび	母ふしゆび
五七九	上	三	手どり	手とり
五七九	上	一七	神ばツて	神ばつで
〃	中	一	二日	三日
五八二	上	三	「むごい嫁」の次へ わらぢくひ迄は能因氣がつかず	
五八三	中	三	こづき	こつき
〃	上	一七	過ぎ	過
〃	上	一〇	「保より」の次へ 手をくんでゐるが間男氣にかゝり	
〃	下	六	「後家のいふ」の次へ てうのはんの銘に曰く日々に負け	
五八四	中	九	般	船
〃	下	二	魯	艫
〃	下	一八	「庚申の」の次へ とめないと所拂に常世なる	
〃	中	五	質店	しち？　しら？

頁	段	行	誤	正
五八五	中	一六	丸○い○	ま○る○め○
五八六	上	七	「けちなかたり」の次へ	おばゞへこ〳〵の氣あるでむづかし・・
〃	下	二	○い○つて來る	○つ○いて來る
五八八	上	四	吃○る	呵○ら○れ○る
五八九	上	一五	内になおとり	内にゐ○なおとり
〃	下	一八	出が○はり	出か○はり
五九〇	下	一六	中山の○	中山は○
五九二	下	一	一かたまり	一ト○かたまり
〃	下	一〇	○二または	○二タ○または
五九三	上	三	よ○つかゝり	と○つか○ゝり
〃	下	七	いろんな	いろい○んな
五九四	上	一九	長吉○	長谷○
〃	中	一五	「あのちい様」の次へ	たかしいと御幣ではらひ神子は舞ひ
五九五	中	一三	初會なり○	初會きり○
〃	下	一三	枕言葉	枕言葉も○
〃	下	一四	岡場町○	岡場所○
五九六	上	九	大國○	大黑○
五九六	上	一六	とつた	とつたる○
〃	中	一	おしうりは○	おしうりに○
〃	下	一	長さ○	長き○
〃	下	四	二階が○指さ○し	二階へ○指を○さし
〃	下	一三	だ○アれか	た○アれか
五九七	下	九	すつ○るやう	すて○るやう
五九八	上	一五	通ひ○	通と○
〃	中	一一	引○ツ叱り	し○ツ叱り
〃	下	七	引汐でない	引汐でないと○
五九九	上	七	足ぶみせぬ	足ぶみも○せぬ
〃	上	一一	寺で○	寺に○
〃	中	一五	中は○	中に○
〃	下	一	しら○ぬ	しれ○ぬ
〃	下	四	孩か○はせて	孩を○かはせて
六〇〇	下	一九	見ない○と	見なよ○と
六〇一	上	一三	いつ迯	いつそ○迯げ○
〃	上	一五	峨眉ひそめる	峨眉を○ひそめる
〃	中	二	出が○はりに	出か○はりに

頁	段	行	誤	正
六〇一	下	二	切つて	切つた
六〇二	上	一六	大氣	大イ氣
六〇四	上	一八	ぬいで	ぬいて
〃	下	一五	めしかはり	めしがはり
六〇五	上	六	文使ひ	文使ヒ
〃	上	一七	多き	多さ、
〃	上	二〇	本にて	本トにて
〃	下	六	伊勢屋むだな事	伊勢屋にむだな事
六〇六	上	一三	たでてかけ	なでてかけ
六〇七	中	七	・歩だが	二歩だが
〃	下	一二	今はのみ	今にのみ
〃	下	一三	「一しあん」の次へ いんのこ／＼そつとふせなさいな	
六〇八	上	一	出る	居る
〃	中	一三	うりもの	ふりもの
〃	下	一九	おや孝行／＼	おや孝行
〃	下	二〇	小舟	小冊
六〇九	上	八	しみに來る	しみて來る
〃	中	一一	うつくしき	うつくしさ
六〇九	下	三	南と	南蠻と
〃	下	一一	損じた	損した
〃	下	二〇	喰ひ	かみ
六一〇	上	七	黑い猫	からす猫
〃	上	二四	伯父	伯母
〃	中	一六	よけると	よけてる
〃	下	一三	いたゝけのとて	いたゞけのとて
六一一	上	三	立て	たて
〃	中	一三	十月	十日
〃	下	一	最愛の	さいわいの
〃	下	一七	「かつたやつから」の次へ 通り者書はまなこに血をそゝぎ	
〃	下	一八	「能書の」の次へ 枕草子もならぬぞと始皇いひ	
六一二	上	八	王子	おふじ
〃	上	一八	だらく	だうらく
〃	下	九	突出し	突出シ
六一三	中	一二	畑瓢箪	畑に瓢箪
〃	中	一三	棒組に	棒組や

頁	段	行	誤	正
六一三	下	一九	くらぶしん	はしぶしん
六一四	下	一三	陰間屋	陰間屋
六一五	上	七	御底	御庭
〃	上	一八	雑子使	雑子づかひ
六一六	上	一四	付き	つき
〃	下	五	厄ばらひ	厄はらひ
六一七	下	九	折れて	折レで
六一八	上	一〇	嫁ぶくりやうへ	嫁ぶくりうへ
六一九	上	一〇	ふり〳〵	ぶり〳〵
〃	上	一三	子がへり	ねがへり
六二〇	上	一三	八百へ	八百屋へ
〃	上	二〇	門で	門て
〃	下	三	強い	強(こわ)い
〃	下	九	連米	連レ米
六二二	下	三	浴油	浴油(よくゆ)
六二三	中	一八	畜道へ落ち	畜生道へ落ち
六二四	下	一四	跡の車も一つ(ひと)所	後トの車も一ッ所
六二五	上	二	後見せて	後ロ見せて
〃	上	八	ぐらツかア	ぐらつかア
〃	下	六	組かしら	組がしら
六二六	上	一〇	いつ見ても	いつ迄見ても
〃	中	一四	落ら	落チ
〃	中	一六	三つ	三ツ
六二七	下	一	わかい	わるい
〃	下	七	下り	上り
〃	下	三	中に散り	中カに散り
六二八	下	三	太鼓珠數で	太鼓持珠數で
六三一	下	九	小使	小便
六三二	上	一〇	折れ込んで	折れ込んだ
六三三	上	五	草だアこんな	草だアなアこんな
六三四	下	一〇	「寺還入り」の次へ 源左衛門いゝおんみつに宿をかし　玉章	
〃	下	二	「松は蕾らぬ」の次へ 俗物が寄つて息子た牢へ入れ　雅情	

頁	段	行	誤	正
六三五	上	一五	こびりついて	こびりついてゝ
六三六	上	二〇	「使く」の次へ 厄年の胴取四の二でつぶされ 和笛	
六三七	上	四	瑠璃殿に。	瑠璃殿め。
〃	上	七	かうへは	かうべは
六三八	下	六	よき星の	よい星の
〃	下	一九	三分なは	三分はな
六三九	上	四	針巻	鉢巻
〃	上	一〇	打つて行く	打で行く
六四〇	上	一五	かまばらひ	かまはらひ
〃	中	一八	御短氣	御短氣を
〃	中	二〇	世をぼせぼめられ	世なせぼめられ
〃	下	三	さもあらんのが	さもあらんのは
〃	下	三	「さもさらず」の次へ 大さわき見附の渦をひつこはし	
六四一	上	一七	二歳。	二才。
〃	上	一八	骨斗り。	骨斗カ。
六四二	上	二〇	はひやツて	ばひやツて
〃	上	二二	付いて	付くで
六四二	中	二	「一筆にこあた」の次へ 六十萬石傾城おふぜう	
六四三	上	一	日つぶしに。	日つぶしを。
〃	上	一	百八を。	百八ツ。
六四三	上	七	小間遣ひ。	小間遣ヒ。
〃	中	三	うけ出すが。	うけ出すと。
〃	中	九	ならぬを	ならぬのを
〃	中	九	賣るは小間物屋	賣る小間物屋
〃	中	三	手ばなしが。	手ばなしで。
〃	下	二	「一番守は一」の次へ 土用干みすぼらしいが嫁のよさ	
〃	下	一九	娘ひなな出し	娘は。ひなを出し
六四四	上	三	出ばを	出はを
六四五	上	二〇	様御出だとだいこ	様が御出だとたいこ
〃	中	二	刀。	力。
六四五	中	一七	成り	盛り
〃	中	一八	高尾は古風	高尾古風
六四六	上	二三	すゑを。	すゑに。
六四六	中	九	「一重箱を」の次へ 女の道のくたびれは尻に出る	

頁	段	行	誤	正
〃	中	一〇	くなし。	くなく。
〃	下	一〇	江手。	江戸。
〃	下	一三	爪音は滅じ	爪音はかんじ
六四七	上	六	うたひで。	うたひは。
六四九	上	一三	「新造の」の次へ	いひわけに女房ひなしへ身をまかせ
〃	下	一三	源氏軍。	源氏軍。
六五〇	下	一三	獵師	漁師
六五一	上	一	じだらくに	じだらくに
〃	上	九	白丁と。	白丁の。
六五二	下	四	十も。若いので	十ヲ。若いので
〃	下	五	二人(ふたり)	二人(ふたアり)。
六五五	上	一三	茶瓶かけ	茶瓶をかけ
六五七	中	七	村の色を	村の色
〃	中	七	莚さん	莚ざん
六五八	上	四	雛が。	雛の。
六五九	下	四	おどる也	おとる也
六六一	上	八	團扇は買ひ	團扇嫁は買ひ
〃	中	四	さかもり	さかぞり
六六六	上	四	榎になつて	杭に是より
六六八	下	一五	九品拂	九品佛
六七〇	上	一五	わつと	につと
六七一	下	五	敷きぞめに。	敷きぞめは。
〃	下	七	行いて	行くと
六七二	下	一〇	兼が仕舞ふと	兼がすんで仕舞ふと
六七三	下	一九	叱られる	吠られる
六八二	上	八	なんぞかぞくれる	なんぞかかぞくれる
六八七	上	一五	桐の	桐に
六九三	上	八	不沙汰の	不沙汰に
〃	下	一二	きすり人の	さすり人の
六九四	下	一	ぬき襟	ぬき襟
六九五	上	六	つツかけきしに	つツかけさうに
七〇四	下	二	はおけたく	はちけたへ
七〇六	上	八	舟	母
〃	下	一三	白いもの	白いもゝ
〃	下	五	顔三度來りや	顔も三度來りや
七一〇	上	八	やあゝ	やあら

昭和四年十二月十二日印刷
昭和四年十二月十五日發行

日本名著全集
江戸文藝之部
索引

編輯兼發行兼印刷者　東京市日本橋區通油町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者　石川寅吉

發行所　東京市日本橋區通油町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番・一八四一番
振替東京一八[illegible]四番